針葉樹会報

第 129 号
2014 年 3 月

目　次

追悼　関恒義氏
亡き関恒義山岳部長を偲ぶ……石　弘光　2
ご子息よりの手紙……関　文秀　2

南チベット　２０１３年秋
――悔恨と反省の踏査行……中村　保　4
踏跡を踏んで……加地　幸雄　6
京都北山……市川　陽一　11
インド　ザンスカールヒマラヤの旅……佐藤　久尚　12

懇親山行
懇親山行「九鬼山」……本間　浩　20
九鬼山　富士見平コース……岡田　健志　21
九鬼山　菊花山コース……原　萌子　22

「藤原組中村短大」の記録……本間　浩　24

平成25年度　新年会報告……竹中　彰　26
新年を迎えて……竹中　彰　26
90周年記念事業のその後……小島　和人　27
新年会に寄せられた会員の近況……28

部歌「山讃賦」の謎……蛭川　隆夫　31

三月会通信……35

編集後記……41

表紙写真＝後立山からの剱岳。関恒義氏のアルバムから

発行日　2014 年 3 月 28 日
発行者　針 葉 樹 会
（会長　竹中彰）
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第 129 号

編集人　小島　和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1
会報幹事／小島和人、井草長雄
川名真理

一橋山岳会ホームページ　http://huhac.com/

追悼――関恒義氏

亡き関恒義山岳部長を偲ぶ

石　弘光（昭36年卒）

昨年の暮れ、ヤロー会の忘年会の折、関ゼミにいた三股から関さんが10月に逝去されたことを知らされた。たしか関さんは、当時の山岳部長であった太田可夫教授（通称ベクさん）のあとを引き継いで、私が現役の部員時代に部長に就任してくれたはずだ。もう30年以上もお目にかかっていないが、またお世話になった方が逝ってしまったかと、本当に寂しくなった。三股から関さんの訃報の知らせを聞いて、半世紀も前のことが懐かしく蘇ってきた。

関さんと初めて対面したのは、私が入部したときの新入生歓迎コンパの席であった。当時関さんはまだ助教授で、新進気鋭の数理経済学者（後で、マルクス経済学に転向）として、学生の間でも広く知られる存在であった。いかにも頭脳の明晰な研究者だなというのが、初対面の印象であった。この人がコンパもたけなわに、一升瓶を股ぐらに抱え「よかちんちん」を先頭きって踊りだしたのには驚いた。私もその後、大学院に進学し研究者の道を進むことになり、山岳部の後輩ということもあり、陰に陽に私のことを気にかけていてくれていた。同じ教授会のメンバーになってからも、いろいろのことを教えていただいた。

ただ残念ながら、山登りにご一緒したことはない。関さんの部長時代には、大きな山の事故で、部長を遭難現場に引っ張り出すこともなく平穏に過ぎていた。その後、部長は勝田有恒（法学部教授―故人）、南亮進（経済研究所教授）と山岳部のＯＢに受け継がれ、最後に私のところへお鉢が回ってきた。一橋にあまた運動部が存在するが、その部のＯＢが代々部長を歴任できるのは、端艇部と山岳部ぐらいであった。

関さんは長野県の明科の出身で朝夕、山を見ながら過ごしたのがご自慢だった。部長時代に、「男は命をかけ、岩登りなどに挑戦するときが一番カッコよく思えるものだ。しかしお前ら決して命を粗末に、無理をしてはならんぞ」と、絶えず私たち部員にコンパの折などに言っておられた。この言葉が今でも、耳朶に残っている。心からのご冥福を祈りたい。

ご子息よりの手紙

針葉樹会の皆様

私は関恒義の長男で釧路に居ります関文秀と申します。

父は、平成の初めに仕事を辞め、小金井で介護を受けながら一人暮らしておりました。平成20年の夏に体調を崩し、立川総合病院に入院しておりましたが、翌年、経管栄養の必要が出るまでに悪化し、強制的に聖路加国際

病院に転院させました。その後、私の知り合いの代々木上原井上病院で親身の看護により、一年以上の入院ののち、大田区の介護施設に移ることが出来ました。

平成22年当時は自分で食事も可能になり落ち着いて穏やかに暮らしておりました。昨年、平成23年5月頃から、尿管結石（手術不能）で、微熱が出たり、食欲がなくなったりして、入退院を繰り返しておりましたが、平成25年10月23日早朝、突然、呼吸不全に陥り、9時29分に聖路加国際病院にて急逝いたしました（享年89歳）。肺気腫による呼吸不全、肺炎、と言うことでした。

早速お知らせ申し上げるべきところ、ご通知が遅れましたこと、深くお詫び申し上げます。神葬祭につきましては、家族葬として身内だけで執り行い、その後昨年12月7日に父の故郷の長野県安曇市におきまして、関恒義平崇道老翁神霊50日祭と納骨を無事済ませました。

父の遺骨は分骨して持ち帰りましたが、機会を見つけ鹿島槍ヶ岳に散骨に参る予定です。皆様の生前父に対するご厚情に心から感謝申し上げます。

敬白

院生時代の関さん

上から3人目・石井左右平、その左下・中村讃治、帽子をかぶりピッケルを持つのが山崎擴、その右が関さん

南チベット　２０１３年秋
――悔恨と反省の踏査行

Only one day "blue sky" expedition

中村　保（昭33年卒）

チベット自治区の未開放地域への外国人の規制はますます厳しくなった。２０１３年10月26日、２年ぶりに老年探検隊の長年の相棒、永井剛さんとラサ空港に降り立ったら、先ずチベット入域許可証をチェックされた。こんなことは初めてである。

踏査の目標はチベット古代文化、「吐藩」王国発祥の地、現在はチベット屈指の観光地である「山南」の南、ブータンとインドとの国境に近い、あるいは国境上の地政学的にアクセスが困難な山域を探ることであった。

目標(1)打拉日（ダラリ）６７７７ｍ山塊の未だ写真のない東面を解明する。西面は２０００年に日本ヒマラヤ協会隊が偵察、試登をしている(アメリカン・アルパイン・ジャーナル２００１)が、東側は空白部である。

雅拉香波（ヤラシャンポー）（6635m）西面　撮影・永井剛

目標(2)インドとの国境上にある未踏の推崗日(Tui Kangri)約７０００ｍ山塊に接近する。インド名はネギ・カンサン。インド隊が初登頂したと誤った報告をしたため（手前のピークを頂上と間違えた）、物議を醸した山である。英国アルパインクラブのジュリアン・フリーマン・アトウッドが２０００年に偵察をしたが、その後登山許可は取れず、禁断の山として残されている。推崗日の南西30㎞のところにあるカント峰７０６０ｍ（１９８８年同志社大が初登頂）が唯一登られているだけである。国境沿いの分水嶺とその周辺には30数座の６０００ｍ峰が連なり、カント峰以外はすべて未登である。

10月26日、ラサには泊まらず、その日のうちに2時間のドライブでチベット自治区四番目の都会、ヤルン・ツァンポー本流の辺の澤当（ツェタン３６５０ｍ）に入った。旅遊局と公安局から幹線道路沿いの大きな町の通行許可証はもらっていたが、澤当から1時間ほどの観光地・蔵王墓から先は中国人でも制限されており、外国人は行くことはできない、とエージェントから釘をさされていたのを承知でやって来たのだ。しかし、蔵王墓辺りでは目的地にはほど遠い。

ガイドのアワンと戦術を協議する。アワンはチベット族で有能なガイド、英語が堪能で友人が多い。いつも私の意を汲んで方策を考えてくれる。幹線道路を行けば最初の検問所（チェック・ポスト）で追い返されるのは必定である。アワンは先ず検問所がどこにあるか情報を集めた。検問所の手前で間道に入り迂回して行き、公安がいる大きな町や村落には滞在しないのがアワンの知恵である。それ以外に目的地に近づく術はない。

10月27日、快晴、朝の気温はマイナス

1℃、澤当を09:00に出発する。2週間前に大雪が降ったという。南チベットの名峰、雅拉香波（ヤラシャンボー6635m）の手前で幹線道路から西側の間道に入り南に進む。雅拉香波西面の美しい景観を楽しみながら吉尔拉（チヤラ）（峠5130m）を越えると、眼前に青く澄んだ哲古錯（チョクツオ）（湖4600m）の先に大パノラマが現れた。幸先がいい。打拉日山塊に連なる6000mクラスの雄大な白雪の山脈である。

が、シャッターを押し続けているうちに突然体調の異変が起こった。頭痛、息苦しさだけでなく、手足が麻痺して動けなくなった。永井さんとアワンに抱えられて車で少し下ったところにある村落（4800m）の食堂に担ぎこまれ横になった。意識障害が起こり悪夢を見続けた。2時間ほどで意識が戻ったので、その日は先に進むのを断念し、大事をとって澤当に下った。

こんな重度の高山病に罹ったのは初めてである。先を急いで高度順化のセオリーを無視したためである。が、初日が快晴に恵まれ写真を撮ることができたのは幸いだった。翌日は休養を兼ねて8世紀に建立された名刹・桑那寺に行った。しかし、体調は回復せず、翌々日の10月29日は朝起きられぬほど弱っていたので、澤当の診療所に駆け込んだ。レントゲンをとり肺水腫の心配はなかったが、血中酸素濃度が62と低い、すぐラサの病院で診てもらえと言われたので、その足でラサに戻り西蔵人民医院に行った。診断の結果、このまま旅を続けるのは止めた方がよいとの医師のアドバイスだったので、踏査行を断念せざるを得なかった。「Only one day "blue sky" expedition」の所以である。

それでも、未踏の打拉日山群とその北に連なる山塊の東面を写真に収めることができたのは収穫で、手ぶらで帰らずに済んだ。打拉日山群について山座同定を日本ヒマラヤ協会の山森欣一会長にお願いしている。次の目的

であった堆崗日への接近はまたの機会に譲らねばならなくなった。永井剛さんには申し訳ないことをした。帰国してから専門家に話したら、一過性の脳梗塞だったかもしれないと脅かされ、とにかく早く下山してよかったと言われた。反省しきりである。今後は初心に帰って高度順化をしてから高所に行く。12月に脳のＭＲＩ検査をした結果は、脳梗塞、脳血栓、動脈硬化、脳血管とも問題ないと判り安心した。

打拉日山塊

10月30日、ラサにて休養。２年ぶりのラサの街は一段と整備され都会的になっていた。チベット族の間でもスマホの普及は急速で、五体投地をしながらスマホを見ている奇妙な光景に驚きもした。ラサからシガツェまでの青蔵高原鉄道の延長工事も進んでおり、２０１４年には開通の予定と聞いた。

10月31日、成都へ戻った。ラサ発のフライト便数は増えている。午前中だけでも、天津（綿陽経由）、深圳（成都経由）、成都４便、昆明（中甸経由）、西安（西寧経由）と８便もある。何時も満席で、中国人の往来は増えているのに、外国人の規制は厳しくなっているのは皮肉である。

許可問題で最後にもう一つ触れておこう。成都とラサを結ぶ２４００㎞の川蔵公路は四川省の巴塘から、あるいは雲南省の徳欽からチベット自治区へ省境を越える外国人のツアーは、ここ２年ほど出来なかったが、２０１３年の秋から「北京の公安局の許可」の条件付きで可能になった。一方、チベット自治区から新疆省へ抜けるツアーは蘭州軍区の許可が必要になったとアワンから聞いた。

踏跡を踏んで

加地　幸雄（昭33年卒）

石原先輩は俳人と承知しておりましたが、ほかにもどなたか作句をなさる、又はなさった方がおられたと思い、たまたま戦後刊行の針葉樹会報を総て保管しておられる倉知敬氏にお尋ねしたところ、御親切に、寄稿された俳句を載せた頁を複写して送って下さいました。その資料によりますと、一九六四年の九号から一九八四年の六四号に亘って収蔵された句は一一九。主に柿原先輩（昭12）の八一句、根本大先輩の三六句です。今日はその中から数句を選び、大先輩の俳趣を惹起した山の経験を探り、私なりに再体験を試みたいと思います。

をとこをみな歌うて更けぬスキー宿

五十代の柿原謙一作。会社のスキー行でしょうか。「をみな」は、男性一般の「をとこ」に対する女性一般。「をんな」はその音便。「を

とこをみな」＝男の人たちも女の人たちも一緒に声を合わせて。『歌うて』は〈うたひて→うたうて→うたって〉の音便系列の第二段階。「うたひて」は固く、「うたって」は崩れた感じ。私の十年程年長、九十歳に近い友達に、「歌って」とか「買って」とは言わず、「歌うて」「買うて」と言われる方がいます。一九三七年卒の柿原先輩には、それほど固苦しく響かない言廻しでしょう。スキーが導入されたのは、明治でしょうか、大正でしょうか。とにかく比較的最近ですから、「スキー宿」は最近の詞。その詞に「をとこをみな歌うて更けぬ」の古調をかち合わせています。古今に加えて、やまと言葉とノールウェイからの外来語のかち合わせもあります。古語古文も新語外来語に同席すると、かしこまってもいられず、くつろいで、和気を醸し出すことになるのでしょうか。一日の山スキーかゲレンデスキーを終え、一同宿でくつろぎ夕餉。食後囲炉裏かストーブを囲んで和気藹々、酒もまわり、山の歌・スキーの歌が次から次へと出て来ます。一人が歌い出すと、皆ついて行き、夜更けて歌声・手拍子ますます盛り上がる情景です。

私も現役時代そのような情景の下、山の歌を沢山習いました。今でもその半分の二十程覚えています。雨のロッキーを歩きながら、「冷雨さら〳〵降ろうとまゝよ注①」など山に聞かせたこともありました。但し現役時代、焚火やストーブを囲んで歌った連中の中に、「をみな」の姿はありませんでした。女性が一人入部しましたが、まもなく消え去りました。

柿原先輩の句を読んで蕪村の一句を思い出しました。

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

「酒肆」は居酒屋、「詩」はここでは民謡などでしょう。漁夫や木樵が一日の仕事を終え、それぞれ家へ帰る途中、居酒屋でくつろいで吟じ出した情景。ＳＨ音の反復で弾んだ句です。但し蕪村は通りかかりの傍聴者、一方柿原先輩はくつろぎ版男女混声合唱団の仲間です。

瓜喰みつみかえる縦走路　柿原謙一

「朝日連峯縦走十七句」の一。「瓜食みつ」で憶良の有名な「うりはめば子供思ほゆ」という歌を思い出しました。「**瓜**」はあまり珍しい字なので、活字が無かったのでしょう。会報では手書きの書入れです。「まくわ」と読むのでしょう。とすると普通「真桑」又は「甜」と書きます。この果物はよく熟すと町でも天下一品。「はむ」は食べるの意ですが、「歯」を動詞化した語なので、うりに歯をかみ入れる触感を伴っています。縦走路を去らんとする最後の日、迎えに来た友達が、谷川で冷した重い瓜を運び上げて来てくれたのでしょうか。新鮮な野菜や果物は食べ得なかったこの縦走もおわらんとする日、道端の岩に腰掛け、甜瓜を食むひととき。その味と触感、読んだだけでもよだれが出そうです。そして歩き越して来た連峰を遠望する感慨無量のお姿。「瓜食み」と縦走路遠望のよい取合わせですね。

安達太良のほんとの空に秋の風　柿原謙一

「ほんとの」は普段言慣らされた詞ですが、ここではほんとにあどけなく新鮮な響きがあり、この句の要でしょう。澄み切った青空を思わせます。注②

山小舎に老岳友と去年今年　柿原謙一

俳句とは妙なものですね。というのは、「きょねん」も「こぞ」も同義ですが、ここが「きょねん」では句になりません。「こぞ」は古い言葉。芭蕉も「去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて」と詰めています。大正期

に生れ、昭和初期卒業の老岳人には、かなり自然に出て来る言葉かもしれません。

とにかく「老岳友」と適合しています。「青年時代の岳友も我も年老いた。戦役や仕事で長年山へも行けなかったが、『去年今年』ようやく又山へ同行できるようになった」という感慨がこもった句です。「登山」とその類語は、夏の季語ですが、この句は無季語、題に「正月の雲取山」とあります。

古スキーはき若人の群に入る　柿原謙一

「若人の群に入る」は「わこうどのむれにいる」「わこうど」も古語辞典に出るほど古めかしい言葉ですが、品があり、「古スキー」をはいた老いた我という自己意識に適合しています。柿原先輩の「古スキー」は、彼の昭和初期の学生時代のものでしたら、木製の単板。「二月の菅平スキー行」と前書きにあり、一九七四年一月の針葉樹会報ですから、一九七三年のスキー行。三六年前のスキーという計算になります。それをはき「若人の群に入る」彼はどういう気持ちであったでしょう。「みかえる縦走路」のように人生路をみかえる契機でもあったでしょうか。

私が、一九六四年に購入したノールウェイ製木製複合板のスキーをはいて、去年山スキーをしていましたら、ある面識のない若者がそれを見付け、古物と認識して、「キャッ！博物館向きだ。写真撮らせて下さい」と叫びました。私は得意になって「いいよ」と撮らせたら、竹杖のストック、古い革靴とカンダハーのクロース・アップも撮って行きました。私のスキー一揃えの年齢は半世紀に垂んとするしろものでしたし、最近の山具・スキー具は日進月歩ですので、柿原先輩のが「古スキー」なら、この若者にとって私のは考古学の対象になりそうな珍品であったことでしょう。私にとっては、使い慣れて自分の体の一部になったような感覚、数寄凝り、バンカラ気味で流行を追うのは御免、ケチンボで新品の値段は天文学的数字、新式具に慣れるまで億劫、まだ使える物はできるだけ使う節約型、使い捨て経済組織反対と七重層の城壁に守られています。でもこの場を借りて白状します。現役時代の片桐のキャンバス製のザックはまだ捨てずに有っていますが、久しく使っていません。柿原先輩のお手本に悖りましたら、あしからず。

華やげる友のまなこに山茂り　根本大

「華やぐ」も「まなこ」も含みのある言葉と思います。「八月二十五日／二十六日久保・佐藤と白山に遊ぶ。齋藤と山麓に会す」と前書きした六句の一。「映る」と言われなくても分るのも、「山茂り」を直接ではなく、「友のまなこ」の映像として見ているのがこの句のみそ。「華やげる」で「老岳友」との久しぶりの山行の喜びにときめく心をひらめかす「友のまなこ」が見えて来ます。「華やげる友のまなこ」と「友のまなこ」に映った山の茂みの取合せ。

岩清水ふくみすすみぬ原始林　柿原謙一

「秩父原生林」と題する二句の一。「口に」となくても分るのは、いいところ。一口目は、涸れた喉を癒し潤すグイ呑み。二回目は何とうまい水かとゆっくり味わいながら飲み下す一口。とすると「ふくみすすみぬ」の一口は三回目でしょうか。すぐに飲み下さず、歯茎や舌頭に冷たい水の感触をめでながら歩き出したのですね。

これは余談ですが、「岩清水ふくみ」から「漱石」という名を想起しました。ほんとうは、「枕石漱流」、「石に枕し流れに漱がん」ですが、ある人が言い間違って顚倒し、「漱石枕流」としたところ、間違いを指摘され、「いや、漱石は石で歯を磨くことさ」と強情張って云い返したという中国の逸話です。

それでは、「枕流」は何の意でしょう。その強情張りの人は、説明に困るでしょうが、私達岳人には、「漱石」と切りはなせば、意味が通ります。川名さんは徒渉中顚倒しても、「枕流」しなかったのは、ほんとうに不幸中の幸いでしたね。私は「枕流」が怖いので、徒渉嫌い、沢登りも避けています。

「秩父原生林」と題するもう一つの句は、

登山道出合ひし友と手を握る

この「出合ひ」は予め計画してあったのではなく、思い掛けない出合いでしょう。「誰か近づいて来るなと思ったら、ヤー、君か！　久しぶりで」という感激の一瞬を美事にとらえていますね。

山小舎の燭かこみけり窓の秋　柿原謙一

「燭」は「ひ」「ともし」「ともしび」とも読めます。「ひい」と延ばして語呂を合わせましょうか。とにかくランプのことでしょう。秋も深まり、山小舎に着いたのは日没後。窓から中を覗いたら先着の人達が「燭かこみ」話し合っていたのでしょうか。

根本大氏にも類句があります。

秋灯顔のみ山の友見ゆる

ここでは根本氏も灯を囲む一人でしょう。連中の顔だけ灯に接し、体は背景と同様闇に溶け込んでいる一景は、フラッシュを使わず撮った写真のようです。「当夜の懇親の宴は心から楽しませてもらった」ということば書きと照合していますし、「山小舎」とことわらなくても山小舎を思わせるのは、この句の強みでしょう。

熊笹を経て熊笹の秋しぐれ　根本大

パラパラッと降ってはやむしぐれは、普通冬の季語。でも秋にも降りますから、その場合は「秋しぐれ」。「熊笹を経て熊笹の」と同じことばを畳みかけたところは、小径を行けども行けども熊笹の密生地という感じをよく表していると思います。雨の滴で枝垂れた笹の葉が山道にもおおいかかり、根本さんのズボンも濡れて了ったことでしょう。

登山果つ古き湯宿に脚のべて　柿原謙一

「朝日連峰縦走十七句」の一。四日間の縦走を終えて、朝日鉱泉の湯殿につかり、疲れを癒しているひとときです。「ゆやど」は柿原先輩の造語かもしれません。私には聊か耳障りなので、大変僭越ですが、詠み更えたいところです。

登山果つ脚をのばさん湯の煙
登山果つ脚ものばさん湯の煙
登り果てて湯後のむくもり酔い心地
登山果て風呂と蒲団の一夜かな
登山果つ手脚のばさん湯の煙

どうもパッとしません。宜しかったら、どうぞ朱を入れて下さい。お願いします。

柿原先輩の句で思い出すのは、ある春山です。島々からの車道は雪に閉ざされ、バスは走らないので、体重の半分は軽いと言われた頃の重荷を背にしたスキー入山です。数ある隧道の入口出口は崩雪で塞がり、固雪のピラミッドの這いあがり、這いくだりの連続でした。横尾の岩小屋を基地とし、C1は五六のコル、C2は三四のコル、そこから今は亡き甘利さんと山本さんが、前穂から吊り尾根を経て奥穂へ。私は五六のコルへ三回でしたか荷上げをしたのを覚えています。入山から廿日後、「登山果」てて上高地へおりて来ると、河童橋あたりの川辺の雪から日に輝く流れに滴がしたたれおちていました。そこから数時間スキーで下り、「古き湯宿」は、名前は忘れ

ましたが、梓川の渓流の向こう側の急斜面を少し登った所にありました。そこの湯殿に浸り「脚のべ」た感覚は今でも新鮮な記憶です。脚腰の疲れを癒す湯にも、我乍らよくやったとの満足感にも浸っていました。これは一九五六年の昔話です。注③

雪渓はよう歩かれしまへんと歩きゆく
柿原謙一

これは山小屋に荷上げ中の土地の人でしょうか。「よう歩かれしまへんと」は大胆な字余りですが、かえって字余りであるため、重みある句の要です。その上、「歩きゆく」といういわば正調語法とよく対照する方言調ですし、しっかり踏み締めて確実に歩き行く姿は、彼の述懐と裏腹なのも、格別です。

孔子は言行一致を道徳の要として教えましたが、彼はあまりにも真面目な先生で、そのため人生のこっけいの共感力の豊かな持ち主とは云えなかったかもしれません。と云うのは、言行不一致は、必ずしも道徳に背くものではなく、ユーモアの泉となる可能性が有るからです。柿原先輩がこの句でとらえた言行はその好例となる可能性を孕んでいます。芭蕉にも例歌があります。

歌もいでず発句もいでぬ夕顔の
実はかしましと唯かへすらん

「夕顔の実」は『源氏物語』の夕顔を暗示していますが、それはさておき、瓢箪のことです。芭蕉は、ある人から特別恰好のよい瓢箪を送られ、何かひねってこのひさごに一筆お願いしますとたのまれました。ところが、ひねもす努めてもひねれません。そこでその瓢箪に「和歌も発句も一句浮かんで来ないので、面倒だから願いは引き受けないで、唯返してしまおうと思ったところ」という意の和歌をしたためました。したためながら、口許をほころばせたことでしょう。柿原先輩の句も、雪渓を「歩きゆく」土地の人は、確実な足運びでしょうから、先輩にも聞こえるよう言い放した言葉は、実感・自信・謙遜をいれまぜたユーモアたっぷり。蕉歌を銘とした瓢箪を受取った人が、かの俳人のユーモアを感受したように、柿原先輩も土地の人のユーモアに共感したことでしょう。

＊　＊　＊　＊

柿原・根本先輩

山の句くりかえし拝誦しました。お蔭で、お目にかかったことありませんのに、あたかも、すっかり御無沙汰していた日本の四季の山々に「去年今年」お供させて頂いたような気持ちです。

倉知兄

両先輩の山の句をお送り下さり、有り難うございます。先達の踏跡を楽しく踏ませて頂きました。

二〇一三年一〇月　猶他州塩湖城にて

【後注　出典明細】

柿原謙一・根本大の掲句　「針葉樹会報」9号64年12月12頁／16号66年11月／18号69年5月8頁／35号72年12月6頁／38号74年1月4～6頁／58号81年3月2頁／60号81年12月1頁／64号84年12月29頁

蕪村の掲句『蕪村俳句集』岩波文庫　125頁

芭蕉の引用文『おくのほそ道』岩波文庫　9頁

芭蕉の掲歌　宮本三郎「瓢の歌――芭蕉俳文資料」『連歌俳諧研究』49号29～30頁

《編者（倉知）注》

①「冷雨さら〳〵」は、正しくは「氷雨」

②「ほんとの」は、高村光太郎が妻・智恵子をよんだ詩集『智恵子抄』にある詩「あどけない話」の〈阿多多羅山の山の上に　毎日出てゐる青い空が　智恵子のほんとの空

だといふ。」が、柿原さんの念頭にあったのでは。

③「古き湯宿」。『針葉樹』11号「横尾・涸沢より前穂高北尾根――昭和三十年三月」によれば、「一九五五年三月三十一日　中ノ湯泊」とあり。（なお、一九五六年三月には明神岳東稜合宿があり、その年、釜トンネル他の崩落で入下山の歩行は難儀をきわめた。しかし下山は、三月三十一日上高地から奈川渡へ達し、湯宿泊はなし（『針葉樹』12号16頁）

京都北山

市川　陽一（昭34年卒）

京都の街並みから北に目を転ずると左側に「愛宕山」、右に「比叡山」、その中間あたりが「鞍馬山」です。「京都北山」はそれから北に若狭湾に迄広がる広大な山並みです。１０００米に満たぬ山容ですが、多くの著作が物され興味尽きない処です。昭文社の地図、現在は「京都北山」のみとなっていますが、20年程前には、２分冊で「京都北山１と２」がありました。それらは部分的にはより詳しく、私が長年跋渉しているのはその「北山１」の地域で20年前にはあった山道もその後登山者なく廃道になっている処が多数あります。

そのような普段人が入らない道で、木に括り付けられた古い道しるべを頼りに歩くのが好きで、今までそのような山歩きに精を出して来ました。「北山２」の北部の山は私には残念ながら未知です。「北山１」の領域は歴史的に、謂れのある場所が多く興味津々です。「比叡山」には私の住む岩倉／八瀬・大原方面からのルートは10本以上あり、その多くは現在利用する人も少なく（人が行かぬと道は直ぐに荒れます）良く利用されるルートは３、４本でしょうか？

又「比叡山」への滋賀県からのルートも同じく10本以上あります。一方「愛宕山」も同様で、東側の「清滝」からの表参道からのルートが最も著名ですが、それ以外に南、西及び北側からのルートもあり様々です。長年に亘り色々のルートから登りましたが興味尽きません。それらのルートには仰々しい名前が付けられています。例えば「比叡アルプス」「東山三十六峰縦走路」「比叡山北方尾根」「愛宕・地蔵山尾根」「城丹国境尾根」「鞍馬尾根」等々です。千年以上に亘り都であっただけに、多くの人が山を越えて京都に入って来ましたので、その当時の人が通った峠道が数多くあり、現在は寂れていますが、ルートは判然としないながらも存在しています。その様な昔の峠道を辿るのも楽しみです。

戦前より（当地で戦前と申しますと「応仁の乱」を指します。第二次大戦ではありません。私のようなよそ者には信じられないですが、本当の話です）北山に就いて多くの書物が出されていますので、それらを参照に「人跡未踏」（？）の山道に入り、迷った事、数多ありました。現在は年齢的に無理は出来ませんので、通常のルートを中心に歩いて居ます。幸いにして現在住んで居る場所が至便で、労せずして登山口に行けますので、気が向き次第、即、山に入っています。但し「愛宕山」の登山口には一時間は掛かります。それでも東京地区の山登りを考えると便利です。

アメリカの山に就いては一年先輩の加地幸雄氏（加地さんと呼ばさせて頂いて居ります）無しには語れません。今から50年以上前の１９６３年、加地さんがプリンストン在の折りに雪のあるキャツキル山（ニューヨーク州中部）に案内していただいたのが初めてで、それ以降、同州北部のアヂロンダック山、隣のニューハンプシャー州のホワイト山又コネチカット州の低山（加地さんより推奨いただい

た）それと現在を含めて頻繁に出かけたのがコロラド州の山です。ここはアメリカ一の高地で４２００米以上の山が53～54座あり、山好きには応えられません。その一つ一つを登ろう！　と意気込みましたが体力が追い付かず現在はギブアップです。

それとハイライトは加地さんが50年以上住まわれて居られるユタ州のソールトレイクシチー近郊の３０００米級の林立する山々（独立する山もあり）、それらを数回案内いただきました。又山岳部の多くの方々がそれらの山登りには加地さんのお世話になって居られる筈です。加地さんはその地元の山に千回以上登って居られるとお聞きました。又加地さんはアメリカの殆どの著名な山に足跡を残されて居られ、加地さんがこれはと言われる数々の山々には是非とも登って見たいと思って居りますが、来年は傘寿になる身、何とも言えません。

最後になりますが京都に就いてです。私、京都在36年になりますが京都では10代住まぬと「京都人」とは認めて呉れません。三百年です。36年では全く馬の骨の「ウ」迄も行きません。京都と言う処は、外面的には魅力的な処ですが、いざ住んで見ると誠に住みにくい処です。普通であれば30年も住めば大きな面をしていられますが、当地では全くダメです。然し自然が残っている点では、他の物には代えられないと思っています。私自身、何れは生まれ故郷の横浜に帰り、今から65年前の中学2年の頃から登り始めた丹沢に戻りたいのですが、現在の丹沢は凄い人出で且つ道も相当変わったと聞きますので、どうするか決めかねて居ます。それに当地は自然が残り、正に山紫水明、山に近く、暫くは当地に居るつもりです。

インド　ザンスカールヒマラヤの旅

佐藤　久尚（昭41年卒）

会社退職後始めたヒマラヤの旅も今年で5回目となる。去年、治安の関係でカラコルムのフンザ行きを見送ったので、今年こそはフンザに行こうと、パートナーの中村雅明氏（昭43年）とも相談し、早いうちから現地エージェント数社から見積もりを取るなどして準備を進めていた。

しかしながら6月下旬、ナンガパルバッドの麓で外国人旅行者がイスラム過激派に襲われるという事件が発生し、またまたカラコルムハイウェイ周辺の治安状況が懸念される事態となってしまった。事件後しばらくたって問い合わせた現地のエージェントからは、「パキスタン政府はカラコルムハイウェイ周辺の警備を一段と強化し外国人の安全を図っているので、治安状況に問題はなくなった。安心して来てほしい」との連絡を受けたが、にわかに信じる訳にはいかない。日本外務省から渡航延期の要請も出された。いろいろ思い悩んだ末、最終的にフンザ行きは見送ることとして、代わりにインドのザンスカールに行くことにした。

ザンスカールには、5、6千メートル級の山ばかりで、名の知れた有名な山は少ないが、ヒマラヤ山脈のど真ん中に位置し、なかなか入り難い山域という魅力がある。また私にとってザンスカールは、インドヒマラヤの中で、まだ足を踏み入れていない数少ない山域の一つであり、いつかは行ってみたいという気持ちがあった。

ザンスカールへのルートには、ラダックから入るもの、ラホールやキシュトワール、または、カシミールから入るものなど、幾つかあるが、昨年、サラウンガ・ラ（ヒマチャルプラデシュ）越えのトレッキングで予想以上に苦労したので、今年は最初からあまり厳し

ザンスカール・ラダック
旅行人ノートチベット〔第３版〕より転載

くないコースにしたいという気持ちが強くあった。そこで調べた結果、ヒマチャルプラデッシュのダルチャからシンゴ・ラ（５０９０m）を越えてザンスカールのパドゥムに至るというコースが、ポピュラーで比較的に楽そうなので、このコースを歩くことにした。そしてトレッキングの後は、パドゥムからバスまたは車でカルギル経由ラダックの中心地

シンゴ・ラで。左から佐藤、中村

のレーに出て、ラダックの景観をも楽しむことにした。

９月９日　晴

成田空港で中村氏と落合い 11:30 発のエアーインディアでデリーに向う。昨年は航空賃をケチって中国東方航空を使ったため、上海での乗換えなどがあり、デリーに着いたのは真夜中であったが、今回は直行便なので夕方デリーに着いて、余裕を持ってホテルに入ることができた。

９月11日　晴

昨年と同じく夕方デリーを出る夜行バスでマナリに向かう。翌朝、８時過ぎにマナリに着く。

９月12日　晴

ホテルに落ち着いた後、今回、トレッキングの手配をお願いしたマルコポーロ社の甘利淳子さんに電話を入れる。甘利さんはマナリから２キロ北の温泉で有名なバシスト村に住んでいるが、この日はたまたまマナリの町まで買い物に出て来ていたので、携帯に電話すると直ぐにガイドを連れてホテルまで来てくれた。

甘利さんは、昨年、サラウンガ・ラのトレッキングを終えた後、中村氏と二人で温泉に入りにバシスト村を訪れた際、偶然、道で出会ったマルコポーロ社の社長ツェリンサンペルさんの奥さんで、なかなかチャーミングな日本人女性である。今回のトレッキングにあたっても、昨年使ったエージェントを含め現地エージェント数社から費用の見積もりを取ったが、マルコポーロ社が最も安い価格を提示したので、手配を依頼したものである。同社はさすがに日本人女性が経営にタッチしているだけあって、トレッキング中の朝食にお粥を取り入れたり、手製の梅干しや醤油を用意したりして、食事に日本人の嗜好を考慮したきめ細かい配慮がなされていて、マ社の起用は大正解であった。

甘利さんとの打ち合わせの後、昨年会ったマハビールタクール氏に挨拶をしようと登山学校を訪ねた。しかしながら同氏は出張中で不在、折角来たので誰か代わりの人に会いたいと思っていると、シニアーインストラクターのインダー・デヴ・シャルマ氏が会ってくれることになった。

同氏に１９８１年にホワイトセール峰で起きた学生３人の遭難の話をすると、同氏は「自分は１９８３年にダージリンの登山学校から転勤して来たので遭難の時にはいなかったが、その後、バタルで一橋のレリーフを見たことがある」とのことで、我々の話を熱心に聞いてくれた。そして同氏は、「１９６８年２

月にインド陸軍の飛行機が中印国境付近で行方不明となったが（当時は、中国軍に撃墜されたのではないかとの憶測も出て大騒ぎとなった由）、２００３年に偶然、ＣＢ山群の南ダーカ氷河で乗組員３人の遺体が発見されたという例があるので、一橋の場合もいずれ遺体が発見される可能性がある」などと、我々を慰めるような話をいろいろしてくれた。お土産に持参した菓子折を渡して遺体発見の折には連絡してくれるよう依頼して登山学校を辞した。

９月13日　晴

約束どおり7時にガイドとコックがホテルに迎えに来てジープでマナリを発つ。途中のバシスト村から甘利さんが乗り込む。甘利さんは、最近亡くなった友人の遺灰をチャンドラ河とバーガ河の出合いで河に流すため、途中まで我々と一緒に行くとのこと。

ジープは去年越えたロータンパス（３９８０ｍ）を快調に越えて10:00にチャンドラ河とバーカ河の出会いに着く。甘利さんは岸辺に線香を立て、小さな陶器の壺から遺灰を取り出して少しずつ河に流したが、我々も流れ行く遺灰に向かってしばし黙とうを捧げた。この後、マナリにバスで戻るという甘利さんをキーロンのバス停で降ろし、ダルチャに向かう。ダルチャは４年前にバスでレーからマナリに抜ける時にパスポートチェクのあった所であるが、今回もここでパスポートチェックを受ける。

Kargyak 河右岸をのんびり歩く佐藤

ダルチャはバーガ河とバライ河の合流点。我々はレーに行く道路と別れて、バライ河沿いに建設が進められている車道に入る。15:10、本日の終点ザンスカールスムド（３９００ｍ）に着き、車道脇の草原にテントを張った。ここは谷合の狭い平地であるが、我々がこれから進む方角には尾根越しにラムジャック峰（６２９４ｍ）の秀麗な雪のピークが望まれ、明日からのすばらしい景色の展開を期待させるものがあった。我々が着いた時には既にスペイン人の若いトレッカーが一人、小さなテントを張っていた。

夕方、どこからともなく馬方と馬４頭が現れ合流した。彼等は我々の荷物を運ぶためにタンゼ村からシンゴ・ラを越えてはるばるやって来たものである。

なお、我々は今日一日で一気に車で富士山よりも高い所に上がって来たため、高山病を心配したが、幸い二人とも高山病の症状を感じることはなかった。

９月14日　曇り

朝食を終え出発の準備を整えて待つも、荷物のパッキングに時間がかかりなかなか出発できない。ガイドとコック、馬方の３人で荷作りをしているが、初日で要領が掴めないのかもしれない。そのうちガイドが先に出発してくれと言うので、8:15、中村氏と二人で先に歩き出す。ショートカットのためガレ場の急な斜面を登って建設中の車道に出たが、いつものことながら歩き出しは息が切れる。

ザンスカールスムドからしばらく先まで道路工事が進んでいて、車道が続いている。約１時間ほど、出来たばかりで凸凹の激しい車

道を歩いて行くと、埃まみれのブルドーザーが1台止まっていて、そこが車道の終点。ちょうど谷の下の方まで見下ろせて眺望がきく場所なので、そこでガイド達を待つことにした。腰をおろしてしばらく待っていると、猛烈な勢いでガイドが歩いて来て、我々に追いつき、その後少し遅れて、馬と馬方も追いついて来た。

そこから先は山腹に付けられたなだらかな山道を辿って、14:30、本日のキャンプ地、チュミングナグポ（４６４０ｍ）に着いた。ここは川沿いの台地の上に開けた草原で、一部崩れかけた石造りの小屋があった。覗いてみたが小屋には人が住んでいる形跡はなかった。

9月15日　曇り時々晴

今日は峠越えということで朝食も早々に済ませ気を引き締めて出発する。シンゴ・ラまでの道は思ったほど急ではなく、歩き易い道が続いている。対岸の山で定期的に発生する雪崩の景観などを楽しみながら、息の切れない程度にゆっくりと登って行くと、傾斜は益々緩くなる。やがて地面に所々雪が現れ、高度がかなり高くなったなと感じる頃、真っ青な水を湛えた大きな池が現れた。そしてそれを過ぎて少し行くと、今回のトレッキングのハイライト、シンゴ・ラ（５０９０ｍ）に着いた。(11:45着)

そこには夥しい数の色とりどりのタルチョー（経文を書いた布切れ）が、積み上げられた石や岩と岩の間に張られたロープに結び付けられていて、ここが昔からの峠であることを物語っていた。風に吹かれてはためくタルチョーを見ていると、いろいろな事情からこの峠を越えた昔の旅人の苦労が偲ばれ、ちょっとだけタイムスリップした気分を味わった。

峠には雪は無く、ただ風が冷たい。周囲には６０００ｍを越えるピークもあるが、雪の少ない岩山が多いので、峠からの眺望は、昨年越えたサラウンガ・ラと比べると今一つと言った感じ。寒くてあまり長く留まっている気も起らないので、写真を撮って去ろうとすると、フランス人の老年トレッカーが一人、馬に乗って我々が来たのと反対の側から登って来た。話しかけてみたが高度の影響を受けているのか、元気がなく声が小さくてよく聞き取れないので、一緒に写真だけ撮って下りにかかる。結局、峠には15分程度しかいなかった。少し下って風の当たらない場所で昼食を取り、15:35、本日のキャンプ地、ラカンスムド（４４７０ｍ）に着いた。河原の砂まじりの草原にテントを張る。夕方小雪チラつく。

9月16日　晴

8:00、出発。昨日キャンプ地に着いた時、2匹の犬がいたので昼食の食い残しのチャパティをやったら妙に我々に懐いて、それ以来我々の後をずっと着いてくる。2匹の犬と前後しながら川沿いのなだらかな道を下って行くと、ガイドが突然道から逸れて何かを見ろと指をさす。見ると岩陰に小さな青い花が咲いていた。ガイドが「ブルーポピイ」と言う。まさかこんな乾燥した所にブルーポピィが咲いているとは思いもしなかったので、俄かには信じられなかったが、よく見ると写真で見たブルーポピイにそっくりな先が半透明な青い花弁の花が二輪、ひっそりと岩の間に隠れるように咲いていた。4年前ネパールのカラパタールに行った時、カラパタールの麓のゴラクシェプでブルーポピイが見られると、何かの本に書いてあったので期待していたが、この時はカラパタールに登るのに精一杯で見られず、心残りであった。それだけに生まれて初めて本物のブルーポピイを見て感激した。

この後しばらく進むとインド軍の兵士20人位の集団が登って来るのに出会った。全員銃を肩から提げてザックを背負い訓練中のようであったが、我々が道の傍に寄って避けていると、最後尾にいた隊長と思しき人物が話

カルギルへ向かうジープから望むダルンダルン氷河。
氷河の奥の白いピークはClimmaltalia　6270m

しかけてきた。そして我々が日本から来たことを知ると、「日本のハイテクは素晴らしい」などと日本を称賛するような事をいろいろ言い、終いにはザックからリンゴまで取り出しくれようとした（リンゴは断ったが、その親日的態度は印象的）。

14:10、カルギャク村（４０５０ｍ）に到着。ここはカルギャク谷の最奥の村であるが、扇状地状の土地の上に20軒位の民家と広い畑があり、最奥の村というイメージがしない。民家は外壁に白い漆喰を塗った立派なチベット風の家が多く、一見しただけでかなり裕福そうな村に見える。ガイドの説明によると、ここには学校もあるし、衛星電話もあるとのこと。そして何よりも驚いたことには、夜になると各家々にソーラ発電による電灯が明々と灯っていて、とても辺境の地という感じがしなかった。

この日は、村から少し離れた河と畑の間の草地にテントを張ったが、夕方、村役人が２人、パスポートチェックのため我々のテントまで出張って来たのにも驚いた。

９月17日　快晴

8:08、テント発。カルギャク河右岸のブッシュも生えていない乾燥した山腹の道を辿って、昼少し前にタンゼという村に着いた。村を少しはずれたところで突然ガイドが道からはずれて畑の中を一軒の農家の方に歩いて行く。何だろうと思いながら付いて行くと、先行したはずのコックと馬方が休んでいた。聴くとそこは馬方の家だと言う。我々が着くと、馬方の両親や妹とその旦那、子供までが出て来て、ミルクティとヨーグルトで我々をもてなしてくれた。馬方家自家製のヨーグルトがなかなか美味しくて、おかわりまでしてしまった。

タンゼ村を出た後、道はカルギャック河の左岸に移り、再び右岸に戻り、高巻のアップダウンを繰り返して疲労困憊の中、17:05、ようやく本日の宿泊地、プルネ（３７００ｍ）に着いた。プルネはカルギャク河とツァラップ河の合流点で交通の要所でもある。ここにはトイレ小屋のある整備されたテント場があり、既に欧米人のグループがテントを張っていた。また、ここには若干の雑貨や菓子などを棚に並べた売店もある。こんな山奥でまさかビールなぞ売っていないだろうと思いつつも覗いてみると、水を張ったタライの中でビールを冷やして売っているではないか。早速、買い求めて飲んでみた。ビールはラベルが剥がれ栓も汚れていて、賞味期限はとっくに過ぎたような外観をしていたが、中身は問題なく飢えた喉には無上の味であった。

９月18日　快晴

プルネにもう一泊してツァラップ河の約８km上流にあるプクタルゴンパ（３８５０ｍ）を見に行く。このゴンパは、案内書によると15世紀に創建されたゲルク派のゴンパで、この地域では有名なものである。ツァラップ河左岸の道を３時間ほど歩いてゴンパの入り口に着いた。入口から見上げると断崖に張り付くように多数の僧坊が建てられており、凄い所にゴンパを建てたものだと感心させられるが、中に入ってみると、僧坊が何層にも分かれており、その複雑な構造にも驚かされる。

さらに最上階の僧坊に上がってみると、そこは巨大な洞窟の中で、不思議な空間が広がっていて、神秘的な雰囲気に圧倒される思いがした。また、ゴンパを見学しているうちにランチタイムとなり、僧侶と修行中の少年僧が大勢（数えてみると35人いた。）テラスに集まり、ブリキのお椀に山もりに盛ったご飯にカレー汁のようなものを掛けて食べるという興味深い光景にも出会った。そしてさらにゴンパの外でも面白い光景を見た。見学を終えて門から出てゴンパを振り返ると、ガイドがゴンパの上の方を指さす。何だろうと思って見ると、ゴンパのある洞窟の真上に幹の色が白っぽい木が1本立っている。それはあたかも昔の蒙古の武将の兜の上にある飾りのように天に向かって伸びている。ガイドに聴くと、ジュネパー（杜松）だと言う。木1本生えていない岩山に何故ジュネパーの木が1本だけ生えているのか。在りえざる所に在りえないものがあるという感じで、不思議でたまらなかった。いずれにしてもプクタルゴンパは1日がかりで出かけて行っても見学するに十分な価値のあるものであった。

9月19日　快晴

この日は当初の予定では、イチャール村まで歩く予定であった。しかし下流からの道路工事が進んで途中のツェタン村まで自動車道が延びて来ているので、そこまで歩けばよいとのこと。大分行程が短縮となったので、いつもよりも遅く9時過ぎにプルネを出発する。一昨日、渡った橋を渡り直してツァラップ河左岸の道に出て、14:15、ツェタン村に到着した。ツェタン村は河岸段丘の上に開けた小さな村で、我々は対岸で行われている道路工事が良く見える河の近くの平地にテントを張った。そこにはフランス人の若いトレッカーが一人テントを張っていた。

夕方テントの中で晩飯のできるのを待っていると、馬方が呼びに来る。何事かとテントを出て見るとガイドもコックもフランス人トレッカーも河と反対側の方向に急いで登って行く。ガイドに追いつき何事かと聴くと、対岸でダイナマイトの爆破が行われるので避難すると言う。河から２００m、対岸の工事現場からは３００m以上離れていると思われる所まで登って対岸を見ていると、突然、轟音がして、こぶし大の石が我々の直ぐ近くまで飛んで来た。我々のテントの近くには民家もあるというのに大丈夫なのか。実に危険で乱暴なことをやるものである。

9月20日　快晴

朝起きてテントを出ると、対岸のロードエンドには我々を迎えに来たジープが停まっているのが見えた。朝食を済ませてツァラップ河に掛かる危なっかしい吊り橋を渡って対岸の道路に出る。ここで7日間一緒に旅してきたガイド達とお別れ。ガイドとコックは来た道を戻ってマナリに、馬方は自宅のあるタンゼ村にそれぞれ帰るというので、チップを渡して彼等と分かれる。中村氏と二人でジープに乗り込み、パドゥムに向けて出発したが、彼等は埃の中で我々をずっと見送ってくれた。思うにガイドのプラカッシュさんもコックのチャンダンさんも馬方のパルジョィさんも真面目にしっかりと自分の役割を果たしてくれて、お陰で気持ちの良い旅ができた。

ジープは途中、バルダンゴンパ（17世紀創建、巨岩の上に建つ砦のようなゴンパ）に寄り、昼少し前にパドゥム（３６００m）に着いた。パドゥムはザンスカールの中心の町なので、それなりに大きな町だろうと想像していたが、着いてみると想像していたよりもずっと小さな町で、何の変哲もなさそうな町なのでちょっとがっかり。午後、街中を散策してみたが、２００m位続く商店街の店はシャッターを下ろした店が多く、街全体が埃っぽく何とも冴えない感じの町であった。（今はオフシーズンなので閉めている店が多いが、シーズン中はもっと活気がある由）

9月21日　快晴

この日は当初からパドゥムの観光にあてる

ことにしていた。ただ観光と言っても周辺にはあまり見る物も無さそう。宿の主人に尋ねると、近くに摩崖仏があると言うので、まずそこに行ってみることにした。道が良く分からず探すのに少し苦労したが、何とか探し当てて行ってみると、河の畔に大きな岩があり、表面に何体かの仏像が彫られていた。仏像は半分崩れて輪郭のはっきりしないものが多く、しかも、そこには案内の表示も無いのでどの程度のものかもよく分からなかった。

その後、山の中腹にゴンパが見えたので行ってみることにした。下からみると簡単そうに見えたので行ってみようと思ったのが誤り、実際に登ってみると予想以上に遠くなかなか着かない。上を見るとがっかりするので、ひたすら地面を見て「年末ジャンボ宝くじで7億円当たったら何に使うか」などと、馬鹿なことを真剣に考えながら登って、ようやく着いてみると、ゴンパの門には鍵が掛かっていて中に入れない。仕方がないのでもうひと登りしてゴンパの裏手に回ってみると、そこには素晴らしい景色が待っていた。眼下には広大なパドゥム盆地とその真ん中を流れるザンスカール河のきらめく流水が望まれ、視線を上げるとザンスカールの山は勿論、遠くラダックの山並みまでが見え、まさに１８０度の大パノラマの世界、しかも背後には綺麗な懸垂氷河が近くまで迫って来ていて、いつまで見ていても見飽きない光景であった。苦労して登って来た甲斐があったと心ゆくまで展望を楽しんだ。

9月22日　快晴

パドゥムからレーまでバス便があるとはいうものの、不定期で当てにならないので、乗り合いジープで行くことにした。一昨日、ツェタン村まで我々を迎えに来たジープの運転手に乗り合いジープの手配を頼んでおいたが、上手くいかず、結局、自分達で探す羽目となってしまった（インド人との約束は時として裏切られる）。朝出遅れたが、街の溜まり場に行ってみると、1台だけそれらしきジープが停まっていた。交渉すると１２０００ＲＳでカルギルまで行くという。他にジープをシェアーする客もいないので、我々だけでジープをチャーターせざるを得ないかと思っていると、前述の運転手の家に泊まっていたインド国境警備隊の若い兵士が、３０００ＲＳ出すので同乗させてほしいと言う。商談成立、ジープをシェアーしてカルギルに向う。

カルギルまで約２４０㎞、道はかなりの悪路で快適なドライブとは言えないが、途中の景色はすばらしい。車窓からいろいろな氷河やピークが望まれたが、中でもキシュトワールの山（名前不詳、地図によると６５５０m？）から流れ落ちるダルンダルン氷河や、ヌン（７１３５m）、クン（７０７７m）の眺めが秀逸。ヌン、クンはザンスカールの盟主と呼ばれるだけあって堂々たる山で、それがスル河を隔てて道路のすぐ脇に見える。こんなに7千メートル峰が車道から近くに見える所は、珍しいのではなかろうか。また、ヌン、クンから流れ出すガングリ氷河が、直接スル河に流れ落ちるその末端の迫力も凄い。

なお、途中のランドルンという村で昼食とパスポートチェックのため1時間ほど停車したが、ここで一人の若い日本人女性に会った。尋ねると「パルダンゴンパまでトレッキングに行く」と言う。インドの山奥の女性の一人旅は危ないなと思うと同時に、その勇気には感服した。そう言えば、デリーの食堂でも1カ月近くインド国内をバスで回り、これからバスでネパールに入り、エヴェレストＢＣまでトレッキングに行くという若い一人旅の日本人女性に会ったが、「本当に日本の若い女性は逞しくなったものだ。それに比べて日本の若い男は、…？」と、改めて考えさせられた。

この日は夜の8時過ぎにカルギルに着き、客引きに誘われるままにバスターミナル近くのシャビーなホテルに泊まった。

9月23日　晴れ

昨夜の客引きのアレンジによりインド人家族ら6人とジープをシェアーしてレーに向う（今回も最初はインド人客引きの約束を信用していなかったが、結果的には約束が裏切られなかった）。今日もまた昨日と同じく悪路のドライブを強いられるのかと覚悟したが、予想に反してレーまでの道路はほぼ全線が舗装されていて、快適なドライブを楽しむことができた。カルギル～レー間はスリナガルに抜ける幹線道路で、軍事的にも重要なので、険しい地形にもかかわらず舗装がなされているのだろう。約7時間のドライブでラダック地方の中心の町、レーに着いたが、4年前に比べて、レー周辺には軍の施設が増えているのに驚いた。道路でもやたらと軍用車と出合う。レーはパキスタン、中国、両国境に近く、軍事的にも要衝の地であることは分かるが、それにしても4年間でこんなに軍の存在が目立つようになるとは思わなかった。日本を発つ直前に読んだ新聞でも、レーの近くで中国軍による国境侵犯事件が起こった旨報じられていたが（レーのトレッキングエージェントの主人に改めて聴いたところ、「あれは単なる政治的ショウだ」と言っていたが）、ひょっとしたら中印間で緊張関係が高まっているのかもしれない。

ジープはレーの街に入り客を順番に降ろして行った。我々が最後の客となったが、街の中心で降ろしてもらい、4年前に泊まったゲストハウスに宿を取った。そして溜まった下着やシャツなどを洗濯し、ザンスカールの旅を終えた。

この後、レーには9月29日まで滞在したが、この間、1泊2日でインド人の若いカップルとジープをシェアーしてヌブラ渓谷への小旅行を楽しんだ。そしてヒマラヤ山脈とカラコルム山脈を分ける河として有名なシャイヨーク谷のフンダール村や、シアチェン氷河に源を発するヌブラ谷のパナミック村（温泉で有名）にまで足を延ばし、ヒマラヤとカラコルムの両方の山の景観を堪能した。

（注）各地の標高は、Trekking in the Indian Himalaya（Lonely Planet）に従った。

懇親山行

懇親山行「九鬼山」

本間　浩（昭40年卒）

（編集注）九鬼山報告は山行幹事の本間さんの総括、Aチームの岡田さんの紀行　Bチームの原さんの紀行の3篇からなります。

日時　平成25年12月1日（日）

九鬼山（山梨県大月市　970m）

全員　禾生駅（9:30）～富士見平（11:50　富士ビューポイントで昼食）

Aチーム　L本間、仲田、三井、遠藤、宮本、三森、岡田

富士見平（13:05）～田野倉駅（15:40）～かあちゃん食堂（16:30）

Bチーム　L佐藤（久）、佐薙、竹中、小島、中村（雅）、宮武、原（山岳部2年）

富士見平（12:40）～札金峠（13:25）～菊花山（15:25）～かあちゃん食堂（16:15）

①快晴に恵まれ、「秀麗富士」を拝見出来ました。

②参加申込者全員（14名）定刻に元気で集合、反省会も滞りなく終え、八王子駅ホームで

左から　仲田、小島、佐藤(久)、佐薙、宮武、原、本間、竹中、三井、宮本、中村（雅）、三森、遠藤

解散しました。三森さんが所用で反省会に出席出来なかったのが残念。

③Ｂチーム（針葉樹会山行現役の精鋭揃い）は、Ａチームの倍の距離を４ピッチで踏破、佐藤リーダーが予定した時間通りに到着。お見事（拍手）。

④Ａチームは、お店に迷惑を掛けないように（女将さんには時間前入店の了承は得ていたが）、出来るだけＢチームと同じ頃に着くよう時間調整しながら下った。それ故コースタイムは参考にならない。

⑤費用の精算

トン汁集金　３９００円（３００円×13名）。反省会（大月　かあちゃん食堂）　飲む人３０００円、飲めない人２０００円で会費を徴収。支払い　３１４００円。残り１６００円は、個々人に払うのも手間ですので、１月の新年会費用に廻したいと思います。ご異議なければ、高崎（俊）総務幹事に預かってもらいます。

⑥残念・反省

▽岡田さんがＢチーム参加の実力をお持ちである事は衆目の一致する処ですが、リーダー補佐として、Ａチームに入ってもらいました。色々助けてもらい感謝です。有難う。

▽三森さん「野点」有難うございました。富士を眺めながらお茶を戴く、ナント云う贅沢。残念なのは、もし事前にこの話を聞いていたら、「野点」を公行事として、費用負担・荷の分担が図れました（トン汁はそのような扱いにしています）。懇親山行で又やってもらえるようでしたら、その際は是非事前に連絡ください。

＊小生は、普通にお茶を飲むように食後に戴きましたが、一口喫しこれは食前に戴くものではないかと感じました。「正式」を教えてください。

▽在京連絡先・高崎俊平さんへの「無事帰着」連絡が遅れてしまいました。ゴメンナサイ。今後かかる事の無きよう充分に注意致しますので、今回はご容赦賜りたく存じます。

九鬼山　富士見平コース

岡田　健志（昭42年卒）

富士急禾生（かせい）駅発（9:30）― 落合水路橋（9:40）― 弥生峠（11:07）― 鈴懸峠分岐（11:44）― 富士見平（11:48～13:03）― 九鬼山（13:07～10）― 札金沢コース経由 ― 富士急田野倉駅（15:40～16:19）― 大月駅「かあちゃん」

快晴無風の好天、富士急禾生駅に集まったのは、佐薙さんをはじめ14名。うち1名は原さん（学生）で唯一の女性。真っ白の雪をか

ぶって、関東からみるより倍くらい大きく見える富士山が駅周辺の家並からチラッと見える。九鬼山々頂からはどんなにきれいに見えるのか、期待に胸ふくらませて出発。

九鬼山（９７０ｍ）は山梨県都留市と大月市の境にあり、山梨百名山の一つ。都留市の秀麗富嶽12景の一つでもある。頂上直下をリニアモーターカーの実験線のトンネルが走っている。

富士急行、中央自動車道と並行する国道を10分歩くと落合水路橋をくぐる。落合水路橋は１９０７年に建てられたレンガ造りの水路橋で近くにある発電所に桂川の水を引くために建造されたとのこと。鳥居を経由する道からはずれ、杉山新道を取る。道はすぐに杉や檜の人工林のなかを登るようになる。そのため、富士山が見える箇所は1か所のみ。

昼前に富士見平に着き、ここで昼食にする。ここから見る富士山は、太陽が左横から逆光気味のため、この時刻では少し「キリッと」しなかった。富士山学の試験をトップ合格した佐薙さんが富士山に関する質問につぎつぎ対応しておられるのは流石だった。

さて、富士見平での昼食である。恒例のトン汁は、今回も主催者、ガイド、ボッカ、シェフを兼ねた本間さんによって味わうことが出来た。アツアツのトン汁は青ネギのきざみが香り、大変美味しく、体を温めてくれた。

さらに今回は、遠藤さんお持たせの鶴屋吉信の上品なお菓子（12月の茶事用だとか）と三森さんの野点のお薄がデザートだった。お菓子やお薄の味に加え、茶道具（チューリッヒ製の茶碗、ほか）や水やお菓子を山のテッペンまでわざわざ持ち上げ参加者全員にいきわたるようにサービスする心遣いには、本当に感謝の言葉もありません。

長躯猿橋駅まで歩き、大月駅近辺の「かあちゃん（酒場の名前）」で合流する計画の健脚組を見送り、ショートカットして富士急田野倉駅まで歩くＡチームは、13時に富士見平を出発する。富士見平と九鬼山は徒歩5分ほど。都留市の秀麗富嶽12景は九鬼山からではなく富士見平からの話であって、九鬼山々頂から富士山は見えません。

九鬼山からの下りは「噂の危険なガレ場」で、工事用のトラロープがフィックスしてある。転ばないように慎重に下った。ガレ場というより、岩の多い急な山道、というところか。これを過ぎるとあとは安全な山路で、降り積もった落ち葉が足元でカサコソと鳴っていた。

田野倉駅では、1時間に2本しかない電車にタッチの差で乗り遅れ大月の「かあちゃん」に到着したら、健脚組が先着していた。

「かあちゃん」は山行の主催者、本間さんの馴染みの店（本間さんという方は山行の終点のどちらにもなじみの店をお持ち）で、休日にもかかわらず「本間さんのためなら」ということでわざわざ店を開けて待っている。ここで反省会をやってお開きとなった。

九鬼山　菊花山コース

原　萌子（社会学部２年）

今回、懇親山行「九鬼山」に現役部員として参加させていただいた。九鬼山は山梨県都留市と大月市の境にあり、山梨百名山の一峰でもある。富士山の展望に恵まれており、今回の山行でも見事な富士がくっきりと一望できた。また、桃太郎が鬼退治にやってきた山という伝説も持つ大変魅力的な山であった。

今回は九鬼山をメインに据え、頂上到着後に最終地の大月に向かうコースと、札金峠、馬立山、菊花山を縦断する二つのコースに分かれての山行をした。あいにく現役部員の予定がつかず私一人での参加となり、ＯＢの

方々には多分にご迷惑をおかけしてしまったと思うが、下りの際のロープの使い方やきつい斜面の下り方など豊富な経験から的確なアドバイスを多くいただくことができた。今回の山行により自分のスキルアップに強く繋がったと実感している。また、道中や山頂でのOBの方々とのお話や頂上付近でのお茶会はとても楽しくまた本間さんから美味しい豚汁もいただくことができ、改めて山の楽しみ方の多様性やその魅力を感じることができた。

私が属していたBコースの記録です。
禾生駅出発（9:30）→ 弥生峠（11:10）→ 富士見平（九鬼山直下の場所）11:50 到着　昼休憩 → 12:40 出発 → 馬立山（14:13）→ 菊花山（15:25）→ 下山（16:05）　所要時間7時間35分

初冬もとうに過ぎ、例年ならば11月ごろから東京でも冷え込みが始まるのだが、今年は比較的暖かく冬山登山に適した快晴の日であった。今日ならば富士山もくっきり見えるだろうと期待を高めながら身支度をする。立川駅から高尾駅に向かう電車に一本乗り遅れてしまい、大月駅でOBの方々と合流した。事前に本間さんからメーリスで頂いていた、今回の山行の急な箇所などを地図で確認。九鬼山山頂からの降りとガレ場の難所、菊花山ルートの急な下りに不安を抱きながらも、段々と山梨の景色に変わっていく電車から少し遅れた紅葉を眺めていた。

9時半に禾生駅に到着し、とりあえず荷物整理と軽く準備体操を行う。初めてお会いするOBの方もいらっしゃるため、自己紹介含めOBの方々の前で挨拶をさせていただいた。私の出身高校である都立国立高校を卒業された息子さんがいらっしゃるOBの方ともお話できてとても嬉しく感じた。駅の前で一枚集合写真を取り、いよいよ出発。道中の気温は確か4度をさしており、手袋をしないと少し肌寒く感じた。

レンガ造りの古い用水橋をくぐり少し行くと登山道に入った。道は一人が歩けるくらいの幅で、初めは山というより森のような空間が広がっていた。天気もよく空が晴れていて、紅葉後の落ち葉で埋め尽くされている道を踏みながら歩くとその音が周りに反響するような幻想的な山道だった。段々と登りがきつくなり、同時に空を覆っていた木々がまばらになり、視界も開けていった。途中小川や湿った岩などもあり、落ち葉とともに滑りやすく危険な箇所もあったので注意して歩を進める。

全員が一列で割とゆっくりのペースで進み、途中休憩も適度に入れていただいた。ジグザグな道を歩き進める途中、OBの方の声で顔を上げると、富士山の姿が木々の間からくっきりと見えた。これほど富士山をはっきりと見たのは初めてだったので、頂上付近ではさらに綺麗に見えるだろうと楽しみにしながら道を進み、11時10分に弥生峠に到着。峠ではOBの方々と今の一橋の様子などを歓談し、今後の山岳部のあり方等についても相談に乗っていただきとてもありがたかった。私が持ってきている飲料が水だけだから、といただいた美味しいネパールの岩塩を口に含み、再出発。

雑木林を歩き進みしばらく行くと、目的地の富士見平に到着（11:50）。驚く程富士山が一望でき、素晴らしい眺めに感激した。富士山の斜面はまるで真っ白い石膏の塊をそのまま割って砕いた様に粗粗しくありながら荘厳で、光を反射しながらてかてかとその存在を示していた。富士の前の山との色の対比や山から見る富士の背景を彩るすすきや木々もまた絶妙な配置で日本の富士を際立たせていた。頂上付近から流れるように吹き出る白い煙も、冬の富士の美しい姿を強調させていた。富士の姿を何枚も写真に収め、昼食をここで取ることに。今回の昼食では本間さん特製の

豚汁をいただけると同時に、山で調理するための道具であるバーナーの使い方を教わることができた。また、美味しいお茶菓子とお抹茶も富士の景色を見ながらいただくことができ、とても豪華な昼食の時間を過ごせた。

12時40分に富士見台を出て、九鬼山の頂上に向かう。富士見台から頂上まではすぐに到着することができ、小広い広場のような頂上から大菩薩連嶺や中央線沿線の山、奥多摩方面を見渡すことができた。ここから先はBチーム独自の山行ルートであり、九鬼山の登りよりもやや速いペースで登り始めた。

次なる目的地である馬立山の途中にある札金峠まで一気に下る道が続き、やや不安になる。やはり落ち葉が積もっており、地面があると思って踏み込んだら足場がないなど、ひやっとする箇所もあった。急な下りがあるところやところどころロープがはってある所、すぐ隣が崖になっている箇所もあった。札金峠を過ぎると木の根やロープが張り巡らされている急な上りがしばらく続き、倒木をまたがなくてはならない場面もあり、息切れしながらなんとか登り切る。ジグザグで幅の狭い急な上りを終えた後にようやく馬立山の頂上に到着。(14:13)あまり展望は良くなく、少し休憩した後に次なる山、菊花山を目指す。

馬立山頂上からすぐ急な下り道が始まっており、下りの経験の浅い私は中村さんの後につき下ることに。怖がりながら降りると体重の重みがうまく足にかからずぐらついてしまう。ロープをうまく使いながら、それでいてロープに頼りすぎずに下らなければならなかったのがとても難しかった。足をかけやすい岩場や木の根を探しながら降りなければならず、不安定なところに足をかけてしまい滑るところもあり、怖い場面もあった。OBの方々からのアドバイスを頂きながら、ゆっくり下り、しばらくするとまた菊花山まで急な上り道となった。途中ガレ場もあり、最後に急な岩場を登った先に菊花山の頂上があった。(15:25)富士見平とはまた違った風景が広がっており、山々を一望できる素晴らしい眺めに、登ってきてよかったなと素直に喜ぶ。

少し休憩したあと、Aグループと合流するため大月駅に向かう。下山の道も急なガレ場やロープを使って降りなければならないひやひやする箇所が何度もあり、最後まで気を抜くことができないと気を引き締める。16時5分に無事下山を終え、大月駅まで歩いて向かう。OBの方々も菊花山という名前に反しきつい山道もあったとおっしゃっていた。無事山行を終えたことに安堵し、明日の筋肉痛を憂慮しながら九鬼山、馬立山、菊花山登山を終えた。

●山行を振り返って

今回、今までにないガレ場やロープがはってある急な下りを経験した。加えて、紅葉の後の落ち葉はとても奥ゆかしかったものの、実際歩く際に滑りやすく少し怖い箇所もあったように思う。しかしそういった不安定な下りの際にきちんと体重をのせ、足を安定してかけられる箇所を探しながら歩く方法などのアドバイスをOBの方々からいただくことができ、とても勉強になった。

また、何よりも美しい富士の姿を見ることができたのが今回の一番の収穫だと思う。頂上でも本間さんお手製の豚汁や、山の上でのお茶会に参加させていただき、「登る・見る」以外の新たな山の魅力に触れ合うことができた。次回は、今回学んだ下りの経験と知識を活かし、更なる山に挑戦できたら良いと思う。

今回も、OBの方々には重ね重ねお世話になりました。ありがとうございました。

「藤原組中村短大」の記録

会員の皆様ご存じのように、現役部員が増加しております。現役だけでは登山の機会が少ないため、本間会員を中心に学生担当幹事

が一丸となって近くの山を歩きまわっています。山に慣れ親しみ、体力をつけるため、現役学生が参加する機会を設けようとするものです。

このプロジェクトを提唱者の本間会員が「藤原組中村短大」と名づけました。記録を見ていただくと分かりますように、藤原会員・中村会員が常に先頭に立って、学生幹事・山行幹事を中心に針葉樹会員が参加しています。今後の企画はＨＵＨＡＣホームページで本間会員から通知されますので針葉樹会員の皆様、ご都合に合わせて是非ご参加され現役学生との交流をお願いします。（会報幹事）

「藤原組中村短大」　山行記録（本間作成）
＊印山岳部員。前嵩西は特別短大生

平成25年

10／13　石割山　　中村、藤原、峯＊。富士山駅～忍野八海～石割山～東桂駅（8時間30分。詳しくは、峯部員記「中村学校開設記念山行・石割山」参照）

10／27　綱之上御前山・扇山・百蔵山　　中村、藤原、前嵩西、本間。梁川駅～御前山～犬目～扇山～百蔵山～猿橋駅（8時間25分。但し本間は扇山～梨の木平～鳥沢駅）

11／16　高尾山南高尾山稜　　中村、藤原、川名、本間、前嵩西、原＊。高尾駅～草戸山～中沢山～大垂水峠～高尾山～高尾駅（8時間30分）

11／23　滝子山・大谷ヶ丸　　中村、藤原、前嵩西、長島＊。初狩駅～滝子山～大谷ヶ丸～笹子駅（7時間25分）

12／8　陣馬山・市道山（計画は＋刈寄山だが、時間切のため手前で下山）　　中村、藤原、宮武、前嵩西、本間。藤野駅～陣馬山～市道山～入山峠～武蔵五日市駅（9時間。但し本間は荷田子～臼杵山～市道山と歩き、市道山で合流）

12／21　鋸山往復（計画は大岳山・馬頭刈尾根だが、積雪のため変更）　　中村、藤原、本間、前嵩西。奥多摩～愛宕山～鋸山～愛宕山前～林道～奥多摩（6時間30分）

平成26年

1／12　鎌倉アルプス全コース縦走（鎌倉アルプス・平成巡礼道・祇園山ハイキングコース・源氏山ハキングコース）
Ａチーム（4コース）藤原、原＊、辰川＊、前嵩西
Ｂチーム（3コース）中村（雅）、同夫人、佐薙、仲田、三井、遠藤、高橋、小島、岡田、本間
北鎌倉駅～建長寺～天園～布張山（昼食）～Ａ～名越切通～祇園山～鶴岡八幡宮～源氏山～大仏～鎌倉駅（6時間10分）
Ｂ～名越切通～祇園山～鎌倉駅（6時間）
なお、その後、横浜にて「新年会」を行う。

1／19　高水三山　　藤原、本間、辰川＊、中野＊。御嶽駅～軍畑駅～高水山～岩茸石山～惣岳山～御嶽駅（6時間）。中野さんの初山行であり、辰川君の初ボルダリング経験

■平成25年度　新年会報告

（２０１４年１月23日　如水会館14階　記念室東）

出席者＝高崎治郎（昭31）、佐薙恭（昭31）、中村保（昭33）、上原利夫（昭33）、丸山則二（昭33）、仲田修（昭36）、遠藤晶士（昭37）、三井博（昭37）、竹中彰（昭39）、本間浩（昭40）、小島和人（昭40）、三森茂充（昭40）、高崎俊平（昭41）、佐藤久尚（昭41）、中村雅明（昭43）、宮武幸久（昭46）、松尾信孝（昭47）、兵藤元史（昭52）、松田重明（昭53）、名和泰三（特別会員）、山崎孝寿（特別会員）、

【学生】小宮山尚与志（商４）、長島弘賢（商３）、伊藤久裕（商３）、吉川悠太（商３）、原萌子（社２）、渡部顕志（経２）、辰川貴大（法１）、中野広美（商１）

●式次第

1．先頭の挨拶（新年を迎えて）　竹中会長
2．講演「２０１３年四方山話」　中村保
梅棹賞、メコン・青海・四川、南チベット、プラハ・フェスティバル（本講演の内容はＨＵＨＡＣホームページに掲載予定）
5．学生部員紹介　長島弘賢（商学部３年）
6．90周年記念事業その後　小島副会長
7．Ｍ（守屋益男）山岳図書館紹介　中村雅明（図書幹事）

※会食・懇談の時に、山崎特別会員から小谷部家・家系図を入手した経緯・家系図が披露されました。また、中村図書幹事が家系図他小谷部全助資料の当ホームページへの掲載を検討しますと補足しました。

現役名簿

（名前、学部、学年、出身高校の順）

小宮山尚与志	商	4	渋谷教育学園幕張高校
町田広樹	法	4	International School of Bangkok
峯　弘卓	社	4	県立大分上野丘高校
伊藤久裕	商	3	県立大垣北高校
長島弘賢(部長)	商	3	都立日比谷高校
吉川悠太	商	3	岡山朝日高校
原　萌子	社	2	都立国立高校
菊田果琳		2	トキワ松学園高校
高橋紗希		2	長岡大手高校
渡部顕志	経	2	津高等学校
高橋直道	法	2	栄光学園
辰川貴大	法	1	山手学院
中野広美	商	1	都立小石川高校

後列左から　辰川　兵藤　三森　仲田　長島　松田　佐藤(久)　宮武。(中列左から) 高崎(俊)　本間　三井　遠藤　渡部　原　中野　小島　伊藤　吉川　小宮山。(前列左から) 中村(雅)　山崎　上原　竹中　高崎(治)　佐薙　中村(保)　丸山

新年を迎えて

会長　竹中　彰（昭39）

皆さん、新年明けましておめでとうございます。寒さ厳しい中でも穏やかな年末年始でしたが、皆様にはお健やかに新しい年をお迎

えのことと存じます。
改めてこの一年を簡単に振り返りますと、
①先ずは、一橋山岳部の復活に向けて現役部員が充実しつつあり、現在二桁の部員が登録されている様です。ただ、一橋山岳部の流れの断絶もあり、部員間で技術の伝承等が難しい中、部員の教育訓練に本間さん、藤原さん、中村さん他多くの針葉樹会員が参加して、山歩きの基礎、色々変化に富む登山経験を積み重ねていることが特筆できると思います。引続き安全登山に努めて大事に成長を見守りたいと思いますが、人的、財政的にこの支援体制をもっと充実していくことが当面の課題と考えています。是非多くのＯＢ・ＯＧのご協力をお願い致したいと存じます。なお、直近で13人の部員もこの3月に3人の4年生が卒業すると10人となりますので、この4月新入生を如何に入部勧誘するかが鍵となります。現役の諸君には大いに頑張って頂きたいと存じます。本日は8名の部員が出席していますので、色々と先輩としてのご体験の開陳など宜しくお願います。
会員の活動については
②中村保さんは昨年6月と10月に2回チベットの東、南への踏査に向われ、また、チェコのプラハフェスティバルでの講演に招かれるなど国内外で相変わらずお忙しく活動されておられ、何時もｈｕｈａｃホームページ上で海外のアルパインクラブや、ＡＡＣ、ヒマラヤンクラブ等のホットな話題をご提供頂き、また梅棹忠夫「山と探険文学賞」受賞の栄に浴されましたが、本日は久し振りにこの場でご講演を頂く予定ですのでお楽しみ頂きたいと存じます。
その他の会員では、佐藤久さん、中村雅明さんのチームが昨年もインドヒマラヤトレッキングに向かわれました。国内では赤木沢などへも向うパーティーがありました。
③次に、一昨年の90周年記念事業としてスタートした「芦安・夜叉神峠周回登山道整備」事業について引続き本間さんなどの手でフォローアップの整備が行われて、昨年には檜尾峠から高谷山までのルートの整備も進んでおります。これには会員、現役部員の皆さんや地元の芦安ファンクラブ、富士通子会社社員の方々のボランティア作業が加わって行われたものです。今後の進め方などについては本年の7月総会までに計画を固めたいと考えております。皆様のご意見も伺いたいと考えております。
④なお、先程も触れましたが、一橋山岳部の活動を活発化させるには財政的な裏付けが欠かせません。ぜひ針葉樹会費、通常の年会費に上乗せしての賛助会費をお願いします。
本年は学生さんのご意向もあり、一昨年に続き、8月下旬に第2回の一般学生公募富士登山を計画しております。引続き佐薙さんには富士山検定一級合格者として格別のご協力をお願いしておりますが、この事業へのサポート参加を含めて会員各位の一層のご支援をお願い申上げます。
⑤また、毎月の三月会は、このところ新たなメンバーの参加も得て継続されております。出入り自由の気楽な集まりですので、出来ればもっと若手会員の参加を期待したい所です。なお、皆様マスコミ報道でご承知のとおり、山の日制定運動は、本年の通常国会に愈々「山の日」祝日化を議員立法で上程することが予定されております。単に登山を奨励するものではありませんが、我々のフィールドである山の恵みに感謝し、自然を守り、次代に引き継ぐことに改めて思いを致す日として、是非ご理解ご支援をお願い致します。
幸い昨年は会員の山行中の事故もなく、過ごせましたが今年も事故のない安全登山に努めて元気にご活躍いただくことをお祈り致します。

なお、敢えて最後に一言、本日の会員出席者は21名と１４０名余の会員総数に対して15％程度と余りに寂しい状況です。皆さん色々とご事情もおありかと存じますが、何とか万障お繰り合わせ頂き、総会にはより多くの会員の皆様とお目にかかれることを期待して、ご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

附言

石原脩さんの心臓手術が成功裡に終了したとのご連絡を頂きました。「肺ガン（完治の由）の次は心臓手術ということで、タイミングを計っていたが、12／22入院先の湘南鎌倉病院で大動脈弁交換手術（ＴＡＶＩ法による）が2時間半ほどで無事に成功したとの執刀医の報告を受け、基本的に問題ないとのことで、今季中にスキー復活の可能性もある」とのお話も伺っており、まずはめでたいと会員の皆様と喜びたいと思います。

90周年記念事業のその後

２０１２年に始まりました90周年記念事業の富士山登山および芦安夜叉神峠・高谷山周辺登山道整備につきましては、会の身の丈に合わせつつも百周年を見据え長期に地道な活動を続け一橋山岳会の活性化につなげて参る趣旨で２０１３年に引き継がれております。今後２０１４年にも持続すべく関係会員の間で話し合われておりますのでご報告し一橋山岳会各位のご協力をお願いいたします。

１．富士山登山

２０１２年には一般学生11名、山岳部員５名の参加を得て、また針葉樹会員９名がサポートで参加し成功裏に８月５日、６日に実施されました。一般学生と一橋山岳会の交流もできました。２０１３年は学生諸君の意向により中止となりましたが、新入部員も増加し、世界遺産に認められた事もあり、登山希望が寄せられておりますので宮武会員にサポートを担当してもらい学生募集をして参加者が多ければ、針葉樹会として応分の支援を致したいと考えております。

２．芦安活性化のための夜叉神峠・高谷山周辺旧道復活

２０１２年には６月から10月にかけて延べ90名（針葉樹会29名、芦安ファンクラブ31名、南アルプス市の富士通アイ・ネットワークシステムズ30名）の参加を得て芦安トンネル東口～檜尾峠間の修復が出来、10月27日に関係者27人でお祝いを兼ねて歩きました。２０１３年には９月21日22日の両日延べ34名（針葉樹会18名、芦安ファンクラブ５名、富士通11名）の参加を得て檜尾峠～高谷山間が大幅に改善されました。２０１４年の５月に高谷山に道標を立て本年度分作業を終了予定です。山道は毎年のメンテが必要です。加えて来年度以降２０１４年中に高谷山～カンバ平間、２０１５年に中池～檜尾峠間の修復・改善を図り、初期目的の周回路を完成させ、２０１６年以降メンテ作業を続けるべく芦安関係者と話しあったうえ、総会にてご審議頂き、各年の作業を具体化してまいりたく存じます。

文責　小島和人（昭40年卒）

会員の近況

新年会に寄せられた会員の近況

昭23年　大島理則　10月末で満90才、気力・体力共に年相応になりました。夜の会合は総て欠席、運転免許証の書替も止めるなどなど。折角の案内ですが、出席出来ませんので悪しからず御了承下さい。盛会を期待しております。

昭28年　海老澤齊　元気ですが、最近は活動も余りありません。

昭31年　鈴木克夫　折角ご案内をいただきましたが、今回は欠席とさせていただきます。会員諸兄のご健勝と新生一橋大学山岳部の発展を願っています。

昭31年　松尾寛二　歳相応の関節痛と難聴に悩みながらも、一応元気に過ごしています。新年会は家事都合により残念ながら「不参加」とさせて頂きます。山岳部、針葉樹会の発展と、会員諸兄の御健勝を祈ります。

昭32年　岡悦郎　持病ＣＯＰＤ（肺気腫）がかなり進行しており外出が容易ではありません（特に酒席・冬場）。下手な俳句を捻り、取敢えず80歳迄はと頑張っています。

昭33年　新居慶司　80才となりましたが、毎日、元気に過ごしております。仕事、ゴルフ、医者へと忙しい毎日です。

昭33年　加地幸雄　新年会は欠席しますが、遠いユタから盛会を祈ります。今年は、山行日数60日を目指していましたが、その目標の寸前、59日で終わりました。来年五月ブータンヒマラヤ歩きを計画中です。完走を目指して新年早々訓練を始めます。皆様もお元気で山をお楽しみください。　謹賀新春

昭33年　小林博　元気になり、一人身生活を満喫しています。

昭34年　沢木一夫　新年会は諸般の事情により欠席いたします。ご盛会を祈ります。

昭34年　市川陽一　毎回代わり映えしない近況です。京都北山には頻繁に入って居ります。然し脚力及びバランス感覚の衰えは超ど級で進行です。全く遅々とした山の登りです。殆ど一人ですが時々同期の澤木君が態々東京より来京都で一緒させて頂く事もあります。又恒例に依り毎年夏季アメリカの山には出かけて居ります。今年は５月と７／８月の予定です。

昭35年　峰高教道　旧年中、お手数をかけ、ありがとうございました。本年も文明利器と縁のない生活を送るつもりです。引き続きお手数をおかけします。本件、〆切りを過ぎてしまい申し訳ありません。もの事がさきえサキエと行ってしまいます。

昭35年　丸子博之　残念ですが先約会合あり、欠席します。盛会であります様。

昭36年　石弘光　新年会には、旅行中につき欠席いたします。ご盛会をお祈りします。

昭36年　有賀盈　寒さが厳しくなるにつれ朝のウオーキングで眺める常念、鹿島槍などがいよいよ美しくなってきました。

昭36年　永井新也　針葉樹会のご案内をいただきましたが、当日は先約が有り、申し訳ありませんが欠席いたします。

昭37年　宮本英治　バランス改善に儚い期待を託し、今月オーダーメイドインソールを発注した。年数回は、手頃な山登りをしたいと願ってます。

昭39年　蛭川隆夫　２０１３年は、冬はキナバル山に登頂、夏は礼文島の考古遺跡国際発掘隊にボランティア参加、秋は縄文検定中級合格などと順調に来ましたが、師走になって入院。２０１４年は１月中旬まで病院暮らしとなりそうです。新年会の盛会を祈ります。

昭39年　竹中彰　相変わらずです。今年あたりが体力の限界かなと思いつつ、それでも何とか「中川メモリアル」でバットレス第四尾根に藤原さんのリードで向かいたいと、昨年から岩場で月に１−２回のトレーニング中です。ＪＡＣ東京多摩支部も来年２月に創立５周年を迎えるので、記念事業を色々と検討して貰っています。ＪＡＣも嘗てとは違って、登山の経験の少ない会員（敷居が極めて低い）が増えていますので、入会後の教育訓練も大事な役割になっており、その点は一橋山岳部にも通じるものがあります（並行的に一般の登山愛好者を対象に登山教室も２コース走っていますので、それなりの負担がかかってきます）。今回久し振りの国際的探検家中村さんの登場を楽しみにしています。

昭39年　村上泰介　あけおめ！　何かとご苦労様です。T中さんの講演を聞きたいのですが、すいません、欠席します。20日から格安ツアーを見つけたのでベリーダンスを見にゆきます。講演内容はぜひとも会報で再録して下さい！　写真を沢山つけて。

昭39年　中橋寿雄　足腰の不調とつき合いながらも、絵や楽器などで新境地を模索中です。それなりに、何とか自適の日々を過ごしたいと思います。盛会を祈ります。

昭41年　坂井益弘　お陰さまで元気です。奔馬の如き一年でありたいと願っております。ご盛会を祈ります。

昭41年　池知昭洋　今回は欠席します。残念です！　来年は仕事の方、整理して針葉樹会に出ようと思ってます。

昭42年　吉沢正　残念ながら当日は海外旅行中につき、出席できません。盛会と、皆様の良い新年を祈念しております。

昭43年　中村雅明　学生支援山行を藤原さんと一緒に10月から1～2回／月行っています。1年生部員も入部し嬉しき限りです。

昭46年　金子晴彦　残念ながら欠席です。バットレスが再開とかで仙人藤原の出張トレーニングを受けることになりました。農業のトレーニングは動的面が少ないため、別途トレーニングをしなければならない様です。冬山は塩見に向かいましたが天候と力不足で敗退しました。気力、体力をどう回復するかが当面の課題です。

昭48年　井草長雄　青梅に転居し奥多摩の山が近くなったので、思い立つと日帰りで登るようになりました。今は、木々が冬眠している間に伐採してわさび田開墾や日当たりを良くしたり、石垣修理の作業をしています。

昭53年　松田重明　昨年、定年となり、現在、再雇用で仕事をしています。

昭55年　米田篤裕　所用ができてしまい参加できません。ご無沙汰しており恐縮しています。

昭55年　岡部寛史　先日、リオデジャネイロに行った折、お客さんを伴ってお決まりの観光コースのポン・ジ・アスーカルとコルコバードを周って来ましたが、居ました居ました。海岸に張り出した奇岩の絶壁に、蜘蛛の子みたいに張り付いたクライマーの面々。穏やかな海面と突き出た岩肌、逆層のようにも見受けますが、登れたらさぞ気持ちが良いのでしょう。私は、ただ旨いビールを飲んで眺めるだけで、ひたすら虚けておりました。ブラジルのビールは、本当に旨い。これは、ほどほどの気温に、乾燥した空気が、影響しているのでしょうね。さした山は有りませんが、目的に拘らず、是非一度お越しください。

昭56年　中西茂　針葉樹会の皆様にはご無沙汰しております。新年会当日は、所要があり、出席はかないませんのでご了解お願いします。針葉樹会ホームページを通じて、皆さんの山行記録等ご活躍の様子はいつも拝見しております。最近は、前神、兵藤、佐藤（活）、神野、佐藤（周）、米田、小林諸兄（針葉樹会若手と称しております）との折を見ての飲み会に出席する程度ですが、山の話や、近況をお聞きしたりして楽しんでおります。山の方は、小学生5年の息子をつれて、小田急沿線の生田の森に行き、カブトムシ取りをするくらいがせいぜいで、自然とのふれあいは、後は釣りかゴルフくらいのものですが、追々、もう少しまともな山に踏み込んでいきたいと思っております。その節はよろしくお願いします。2014年度も皆様の山行でのご活躍をお祈りしております。

昭56年　小林修　先約あり欠席させて戴きます。ご盛会をお祈り申し上げます。ここ数年、アウトドアからインドアへ転進、剣道や居合道に熱中しております。

昭59年　石川保典　いつもご連絡等、誠に有

難うございます。関西在住のため、欠席とさせて頂きます。新年会のご盛会を祈念申し上げます。近辺の２００～３００ｍ程度の山には登ることはありますが、高山にはすっかりご無沙汰になってしまっております。

昭59年　安島孝知　何時もご連絡をありがとうございます。欠席ですが、盛会を念じております。

昭60年　石丸義男　現在はロンドンに赴任中ですので、残念ながら不参加とさせて下さい。

昭63年　川名真理　新年会は繁忙期と重なり失礼します。2、3月はスキーの稽古に励みたいと考えています。最近、なんと、デモなどに出かける機会が増えました。

平1年　高橋弘行　お疲れ様です。遅くなりましたが、新年会は欠席とさせてください。今まで未確定だったのですが、今日になって仕事上の予定が詰まってしまいました。なお、近況をということですが、去年からＮＨＫの解説委員になりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

平6年　田形祐樹　伊勢で弁護士をしています。伊勢神宮も平成25年10月に新しくなったばかり遊びに来て下さい。事前にご連絡下さい。

部歌「山讃賦」の謎

蛭川　隆夫（昭39年卒）

佐薙恭さん（昭和31年卒）が「山讃賦」の譜面探しをされたことがあります（HUHAC-GroupMail：４７６を参照）。それを契機に、歌詞に興味がわき、中村雅明さん（昭和43年卒）の協力を得ながら印刷資料を調べましたので、その結果を報告します。

■標題について

漢字表記は「山讃賦」か「讃山賦」か？　また、読みは「やまさんぷ」か「さんさんぷ」か？

それを、次の資料によって調べました。かっこ内は発行年または作曲年です。

①『針葉樹』第1号（１９２５）では、山讃賦
②「増山楽譜」（１９３１）では、山讃賦
＊HUHAC-GroupMail：５２３を参照。
③『針葉樹』第12号（１９６０）では、讃山賦
④『針葉樹会報』第77号（１９９１）では、山讃賦
＊『「山讃賦」由来』（増山清太郎）が投稿されています。以下『由来』として引用。
⑤『針葉樹会会員名簿』（１９９７）では、山讃賦

我々は部歌の標題を山讃賦と書いて「さんさんぷ」と読んでいるが、『由来』によると、作詩家の松崎武雄氏は山讃賦を「やまさんぷ」と読ませるつもりだったようです。「山（やま）」への「讃賦」というわけです。ところが、同じく『由来』によると、山讃賦は部歌となった当初の頃から「さんさんぷ」と読まれていたという吉沢一郎さんの証言があります。「さんさんぷ」と読むか「やまさんぷ」と読むか。増山さんは『由来』で、それは「今後の問題に属する」と述べました。

興味深いことに、③の『針葉樹』第12号は、山と讃をひっくり返して讃山賦としました。「讃山（山を讃える）」の「賦」というわけです（これは印刷上の誤植でしょうか）。

「さんさん」と音読みをする限り、讃山とした方が漢字熟語の構造として自然です（登山・散髪・洗車・拍手・作曲・殺人……すべて動詞が先に来て次に目的語が来る）。そう考えると一概に誤植と決めつけるのも憚られます。

『針葉樹』第12号は、標題以外にもいろいろな変更を、原典である①に対して加えています。讃山も、単なる誤植ではなく、何らかの考え方に基づいた変更だったのかもしれません（その辺を同号の編集者に教えていただきたいものです）。

増山さんは、上記のとおり読み方については未解決の問題と認めましたが、漢字表記を讃山賦に変更するなどとは思ってもみなかったはずです。これは想像ですが、③で標題までもが変えられたことに危機感を抱いた増山さんは、その31年後に『由来』を書いて「山讃賦だよ」と注意を促したのではないでしょうか。今のうちにと思い筆を執られたのでしょうか。増山さんが亡くなられたのは、それから9年後のことでした。

増山さんが標題の読み方という宿題を残したのは、１９９１年。それ以降、何らの検討もなされることなく今日に至ったことになります。

■歌詞について

・1番の白銀と霊香の読み

印刷資料での「白銀」と「霊香」のルビ

①『針葉樹』第1号　無し
②ａ「増山楽譜」の歌詞　無し
②ｂ「増山楽譜」の譜面　しろがね　れいこう
③『針葉樹』第12号　はくぎん　れいきょう
④ａ『針葉樹会報』第77号の歌詞　無し
④ｂ『針葉樹会報』第77号の譜面　しろがね　れいこう
⑤『針葉樹会会員名簿』　はくぎん

原典である①にも、①に依拠して印刷された②ａの歌詞にも、白銀と霊香にルビがありません（金箭と東には、きんせん、ひんがしとルビがあります）。

しかし、②ｂの譜面には、1番の歌詞が長音記号を使用してカタカナで表示されています。ここでは、それをひらかなに直して表記しました。

増山さんの『由来』の記述からすると、②ｂの譜面の読み（しろがね／れいこう）は、（作詞家ではなく）作曲家が決めた可能性があります。

③の『針葉樹』第12号が「はくぎん」と「れいきょう」を採用した理由は分かりません。『由来』に「この歌詞は……何時も印刷ミスが多いので、（①に）発表されたものを、そのままここに再録する」と述べられています。そこで、④の1番は、当然ながら①と同じになっています。ただし、2番以降には、新たな印刷ミスが生じています。

＊『山讃賦 or 讃山賦の詩の変遷』　一橋山岳会ホームページを参照

資料の詮索を離れて、言葉を吟味してみます。

白銀：しろがね？　はくぎん？

音符とどちらがより合うかを見ます。拍数はどちらも4拍、アクセントの型はどちらも平板型（第1拍が低く、第2拍以降が高い型）で、両者は同等です。

意味の点から比較します（日本最大の『日本国語大辞典』などを参照）。雪の白さをたとえる「色」としての意味は両者に共通ですが、「雪」そのものの意味があるのは「はくぎん」だけです。

1番は雪山の夜明けを描写したものですから、雪の意味内容を有する「はくぎん」がベターだと言えます。

霊香：れいこう？　れいきょう？

国語辞典では、『日本国語大辞典』をはじめとして、「れいきょう」＝「本見出し」、「れいこう」＝「から見出し」とするのが多数派です。どうやら、室町時代の終わり頃から「れいきょう」と読まれていたようです。

漢和辞典では、『字通』（白川静）に用語例として「霊香」がありますが、その読みは「れいきょう」です。

以上から、「れいきょう」がベターだと言えます。

備考：香の音読みで「こう」は呉音、「きょう」は漢音ですが、呉音で読む単語は、辞書を見ても（将棋の）香車などきわめて少ないようです。

言葉の吟味という点では、①原典の読み「しろがね」と「れいこう」ではなく、③『針葉樹』第12号の読み「はくぎん」と「れいきょう」に軍配があがるようです。

・2番の崇厳？　荘厳？　崇厳？

2番の最後の節の「×厳の山におろがめ」の×に使われている漢字と、×の読みについて。

印刷資料での「×厳の山」の×の漢字と音読み

①『針葉樹』第1号では、崇　スウ
②「増山楽譜」の歌詞では、崇　スウ
③『針葉樹』第12号では、荘　ソウ
④『針葉樹会報』第77号の歌詞では、崇　スウ
⑤『針葉樹会会員名簿』では、崇　スイ

⑤の崇は、「飲み過ぎが祟（たた）って頭が痛い」などというときの漢字です。祟と字形が似ていることから生じた誤植でしょうから、検討の対象外とします。

備考：崇は「山＋宗」で、祟は「出＋示」で構成されています。

注目すべきは、③『針葉樹』第12号が、荘厳という、崇厳とはまったく別の言葉で印刷されたことです。同号発行年に入部した私は、ずっと「ソウゴンのやまにおろがめ」と教わり、歌い、記憶していました。

では、崇厳も「ソウゴン」と発音するのでしょうか。いくつかの漢和字典で調べましたが、崇の音はスウ（常用音）、シュウ（漢音）、ズウ（呉音）であり、ソウはありません。ただし、『字通』に「声符は宗そう」とあります。想像をたくましくすれば、この「宗＝そう」から、崇厳→そうごん→荘厳と変転したと考えられます。

『日本国語大辞典』で「崇厳」を引いてみました。意味は、「容易に近よりがたく、おごそかなこと」。昔からある言葉ではなく、大正時代にできた、かなり新しい言葉です。初出は１９２０年。その年に寺田寅彦が『旅日記から』という連載物の一篇として俳句雑誌に寄稿した随想に崇厳が出てくるのです。それは、山讃賦が『針葉樹』第1号に載るわずか5年前でした。１９０９年4月27日、寅彦は汽船で紅海をスエズに向かいましたが、その時に左舷から見たアフリカの「赤裸の連山」を形容して「この世とは思われない崇厳な美しさ」と日記に書いたのでした。『旅日記から』は、ネットの青空文庫で読めます。

余談

この項を書く寸前になって、ネットの「ＹＡＨＯＯ知恵袋」で、「崇厳　この漢字の読み方と意味を…教えてください」なる質問と、上記の『日本国語大辞典』を引用したベストアンサーとを発見。崇厳を追求するために図書館に通い詰めたのは何だったのか…（苦笑）。

・4番の殿堂と宮廷の読み（「でんどう／きゅうてい」派と「ところ／みやい」派）

印刷資料での「殿堂」と「宮廷」の読み／ルビ

①『針葉樹』第1号では、無し
②「増山楽譜」の歌詞では、無し
③『針葉樹』第12号では、無し
④『針葉樹会報』第77号の歌詞では、無し
⑤『針葉樹会会員名簿』では、ところ　みやい

「殿堂」「宮廷」の読みは、世代によって、4拍派（「でんどう」「きゅうてい」派）と3拍派（「ところ」「みやい」派）に分かれています。三四郎会世代（筆者およびその数年前後）は、4拍派です（２０１３年5月の三四郎会で参加者に聞いたらそうでした）。それ以前の世代も同じです。三四郎会世代よりも下の世代は、１９７０年前後に「ところ」「みやい」派となったようです。

詩としては4拍がいいか3拍がいいか

ここでは、山讃賦を歌詞としてではなく一

篇の詩としてとらえて、4拍と3拍のどちらが詩としてふさわしいかを考えてみます（前述のように、作詩家は、山讃賦が声に出して歌われることを想定していませんでした）。

山讃賦の1番は、〈むらさきの〉〈くもゆらめけば〉から、〈きみみずや〉〈ひんがしのそら〉まで、五七調で、五・七を6回繰り返して12句体（72拍）とした定型詩となっています。しかも、音調と句調とが合致した正格です。2番と3番もやはり五七調で12句体の正格です。この詩形が4番にも採用されていると見なすのが自然でしょう。

そうすると、殿堂と宮廷とをそれぞれ3拍で読んで、

〈ああやまは〉〈わがゆく○○○〉
〈ああやまは〉〈わがすむ○○○〉

と、五・七・五・七とすべきとなります。

○○○に3拍の「ところ」と「みやい」をそれぞれ当てはめるのは、熟字訓（広義の当て字）だと思えばいいでしょう。山讃賦はすでに熟字訓を使っています（1番の白銀／しろがね、四方／よも、2番の生命／いのち、3番の桔梗／ききょう、百合／ゆり）。③の『針葉樹』第12号が4番で嗚呼と書いて「ああ」と読ませるのも熟字訓です。

備考：3拍かそれとも4拍かという問題は、当然ながら、音符との関係でも議論すべきでしょう。音痴の筆者には確言できませんが、3拍の方が音符に合っているように感じられます。もちろん、4拍ではまったく歌えないということではありませんが。

「ところ／みやい」の歴史

まず、作曲家が、「殿堂」を「ところ」、「宮廷」を「みやい」と読んで作曲した可能性があります。それは、『由来』（増山清太郎）によると、作曲家が「漢語は作曲に都合のよいように読んでおいた」と話していた事実があるからです。

戦後は長らく「でんどう」「きゅうてい」が伝承されてきましたが、上記のように1970年ごろから現役学生の間では「ところ」「みやい」と歌われるようになりました。それにはOBの関与があったのかもしれません（有力OBが月見の宴で「ところ」「みやい」と歌っていたという記憶証言があります）。

さらに、「ところ」「みやい」とルビが付された山讃賦の文字史料が存在します。⑤『針葉樹会会員名簿』の付録2です。この発行年（1997年）のころまで、30年間ちかく、「ところ」「みやい」が歌い継がれたことになります。

その後、山讃賦の伝承そのものが山岳部の中で途絶えた時期を経て、歌集『ひとつばしのうた』（仮称、正式な歌集名は不明）を参考にして部員が山讃賦を歌う時代がありました。同歌集は、「ところ」「みやい」のルビだったようです。「ボート部や応援部、一橋寮など、すべての部歌・一橋に関連する歌が入っていた歌集」とのことなので、どこかで発見できないものかと思います。注：この段落は、山田秀明さん（平成15年卒）の中村雅明さん宛返信メールに依って書きました。

定型詩としても音符の面からも3拍の方が望ましいという思想が、想像（むしろ妄想か）をたくましくすれば、作曲の1930年ごろからずっと受け継がれていたことになります

1番の最後は「東の空」かそれとも「東の空を」か

拍数の問題を論じたので、ついでに述べます。③の『針葉樹』第12号のみ、「東の空を」と、助詞を補いました。そして「東」のルビは「ひんがし」を踏襲したので、「ひんがしのそらを」なる8拍の変格となってしまいました。定型詩である山讃賦の五七調という基本から逸脱してまで「を」を補う必然性はないと思います。

まだ細かい点で述べたいこともありますが、これで私の歌詞調べの報告を終わります。

三月会通信

■平成25年11月18日■

【出席者】 佐薙、三井、遠藤、本間、小島、佐藤（久）、岡田、宮武、高崎（俊、記録）

▽久しぶりに、何時も使っているラウンジの角席が一杯になる9名の参加を得ました。会も盛り上がって、これからもこの盛況を続けたいものです。

▽本間さんが「白根ケーブルネットワーク」から取り寄せたＤＶＤ「南アルプスとともに」を小さい画面ながら再生しました。この「ネットワーク」の20周年記念特別番組で取り上げた、南アルプス市芦安地区の「美しい自然や動植物」、「全国から訪れる登山者達」と「登山者の安全を守るために活動する人々」の3部作になっていて、「登山者の安全…」の中に、登山道を復旧・整備する「一橋大学山岳部ＯＢ会、針葉樹会」が登場します。丸太を運び上げたり、チェンソーを操作したり、鉄杭を打ち込んだり、普段は見られない勇ましい姿が見られます。このＤＶＤは部室に保管する予定です。

▽計画を立て始める時期としては決して早すぎる事は無いそうですが、来年の夏に知床・羅臼岳に登る話が出て来ました。遠藤さんからは、その昔、中川（滋）さん、大さんと一緒に登った、斜里岳にも行った話、他には、山本（健）さんご自慢のテントを担ぎ上げた話等々。熊が怖かったら北海道の山には行くな、とか勇ましい話もありました。知床だけでは勿体無いので、他に何処へ行くか、雌阿寒岳、斜里岳等が候補になっています。7月はバスが通っていないので、8月に入ってからになるのでしょう。ＪＲの鉄道は大丈夫でしょうか？

▽富士山吉田口五合目の「佐藤小屋」は何時も開いているのだろうか？　の話で、原則年中無休になっているが、オフシーズンは直前に電話等で確かめた方が良い、とのアドバイスがありました。電話で事前に話を聞いたとしても、冠婚葬祭等で閉まっていたケースもあった様です。この時期、スバルラインは閉鎖されているので、雪上訓練合宿のときの様に、富士吉田から浅間神社を通る登山道を経由するしかアプローチはありません。

▽富士山と云えば、吉田口が最も人気があり、次いで富士宮口、アプローチの長い御殿場口（夏でも自家用車の乗り入れ制限が無い）等あるが、青木ヶ原樹海を抜ける「精進口」登山道も捨て難い趣のあるルートだそうです。佐薙さんは4、5年前に、吉田口から登って佐藤小屋で1泊、精進口を下りて精進湖の民宿に1泊、で楽しまれたそうです。

▽もう一つ富士山に関連して、昨年は実施して好評だったけれども、今年は見送った「一般学生を引率して富士登山」を来年は学生主体で、山岳部の山行の一環としてやろう、と云う話が持ち上がっています。新人の勧誘に有効であるならば、ＯＢ会としても、チャーター・バスの料金の一部くらい負担して、支援してやろうではないか、という意見があります。多くの会員の皆さんのご意見を伺いたい所です。

▽針葉樹会のホームページで流されている「山讃賦」ピアノ演奏を聞きました。廻り目平のＯＢ現役合同合宿では、本間さんが即座に「我々の唄っていたメロディーとは3カ所違う所がある」と指摘された様です。佐薙さんが、ご自分で唄われたメロディーを奥様が譜面に落とされた楽譜をお持ちになりましたが、集まっているメンバーには、二つの楽譜を比較しても、良く理解出来ず、残念ながら役には立ちませんでした。

▽暫く前に、佐薙さんが「剣山の朝」（吉田博作、１９２６年）という写真を御持ちになり、「撮影場所は何処か?」の宿題が残って

いました。業を煮やした御本人が今年鹿島槍に登られて実地検分をされました。遠景・中景からは、大体この辺と言えるのだが、残念ながら近景で「ここだ！」と言えるまでには至らなかったそうです。

▽新宿駅西口、銀座1丁目、赤坂と店を構えて、多くの針葉樹会員がタムロした「ミネ」さんは、今どうしているのだろうか？　最新の情報は、東日本大震災の直後に那須に住む原さんの所に見舞いのハガキが届いた、という佐藤（久）さんの話がありました。長崎県の、普賢岳大火砕流で大きな被害を受けた島原市に住まわれているようだ、元気で居れば90歳は超えているはずだが。何方かご存知でしょうか？

▽どうしたきっかけだったかは思い出せないのですが、漱石の『三四郎』の中にある「かあいそうだたほれたってことよ」、「Pity's（ピチーズ）　akin（アキン）　to（ツー）love（ラッブ）」について侃々諤々。「人間60才を過ぎたら「カキクケコ」が大事だ」という事を納得して落ちになりました。「カ：感動」、「キ：興味」、「ク：工夫」、「ケ：健康」、「コ：恋」。この中では「コ」が最も大事だ、とは誰の発言だったでしょうか。

▽「語られぬ　湯殿にぬらす　袂かな」と芭蕉が詠った事でも知られる湯殿山に関して、芭蕉はどのように歩いたのか、日程・ルートに疑問あり、と問題提起がありました。湯殿山神社のＨＰに行って「ＦＡＱ」を見てみましたが、「御祈祷料はいくらか？」など余りに世俗的な内容ばかりでがっかりです。「語られぬ」対象はご神体だけのはずで、地元の本間さん、ご確認方。

▽元気なオーション会の皆さんは、五街道を踏破された後、次の目標は？「奥の細道」もあるが糸魚川から松本に至る「塩の道」（千国街道、信濃側では糸魚川街道、越後側では松本街道と呼称される）も捨て難いな、という話でした。

▽各方面に薀蓄のある遠藤さんは、神社、カラオケ、剣舞と活動範囲を広げていますが、相変わらず「日本百名城」巡りを続けられています。最近は、火祭り「松明あかし」でも有名な福島県須賀川城、「天空の城」としても知られ、霧の上に浮かぶ姿が有名な兵庫県竹田城等に、山崎さん（特別会員）の愛用キャンピングカーで出掛けられているそうです。竹田城では、向い側にある山に登って見たが、霧は出なかった、写真家が大勢来ていたそうです。「日本百名城」の次には「欧州百名城」が続きます。

▽「四神会」の会合に出席されていた丸子さんが久しぶりに顔を出されました。

●山行報告

佐薙　11／3、4　木曽路　鳥居峠越え
三井　なし
本間　10／27　御前山～扇山。藤原組（中村学校）山行
11／7　（鶴岡）金峰山
11／9　高尾山。いろはの森～3号路
11／16　高尾山　南尾根。藤原組（中村学校）山行、高尾駅から高尾駅まで歩く
中村（雅）　10／27　梁川駅～御前山～犬目部落～扇山～百蔵山～猿橋駅。本間さん、藤原さん、川名さん友人。駅から駅ハイキング、本間さんは扇山から下山
11／16　高尾駅～草戸山～中沢山～大垂水峠～高尾山～高尾駅。本間さん、藤原さん、川名さん、川名さん友人、原さん（山岳部2年）、中村（雅）。駅から駅ハイキング　中村学校（学生訓練山行）
小島　なし
宮武　なし
佐藤（久）　なし
岡田　なし
高崎　なし

●山行計画

佐薙　12／1　九鬼山
遠藤　12／1　九鬼山。クロー会生存者全

員参加（倉知、三井、宮本、遠藤）
中村（雅）　1／23　藤野駅～滝子山～大谷ヶ丸～曲沢峠～慶徳院～甲斐大和駅。中村学校（学生訓練山行）
11／25　毛無山。藤原さん、宮武さん、戸川さん、中村（雅）。アプローチ車山行
12／1　九鬼山。針葉樹会懇親山行
12／8　戸倉三山。中村学校（学生訓練山行）
12／22　東桂駅～鹿留山～杓子山～倉見山～三つ峠駅。中村学校（学生訓練山行）
宮武　11／25　毛無山。藤原、戸川、中村（雅）
本間　11／22　矢倉岳。神稜会山行
12／1　九鬼山。懇親山行
12／8　戸倉三山。藤原組山行
小島　12／1　九鬼山。懇親山行
12／8　戸倉三山。中村学校
佐藤（久）　12／1　九鬼山。針葉樹会懇親山行

■２０１３年12月16日■

【出席者】　佐薙、三井、遠藤、竹中、本間、小島、佐藤（久）、中村（雅）、宮武、高崎（俊、記録）

▽いつもの「三月会」が始まるのは17時頃ですが、その前に有志が集まって、山岳部支援の話し合いが持たれていました。本間さんがまとめられた現在の部員は、４年生３名（小宮山、町田、峯）、３年生３名（伊藤、長島、吉川）、２年生３名（原、菊田、高橋）、１年生１名（辰川）と合計10名になります。意欲的に活動したい部員も多く、出来る限りの支援をしたいものです。ただし、伝統が途切れるという事がこんなに大変な事なのか、と思わせる事態で、言わば「手取り足取り」の様な、きめ細かい指導が暫くは必要になりそうです。物心両面からのＯＢ・ＯＧの支援が望まれます。

▽この一環として始められているのが「中村学校」です。藤原さん（44年）が山岳部員の基礎技術習得・体力向上を目的とした東京近郊の日帰り山行を企画し、中村（雅、43年）さんがそれに賛同し開設されました。10月27日の石割山から始めています。従来の「藤原組」山行の学生向け山行とも言えます。新年からは「ＦＮ（藤原組中村）短大」（仮称）として本格的に活動を始めます。例えば「駅から駅」山行の様に、多少辛い訓練的な要素（南アルプスの長い林道を黙々と歩かされた経験は誰もが持っていると思います）も組み入れて行くそうです。「俺も手伝ってやろう！」という会員の皆さんの出現を期待しています。

▽楽しい山行も忘れてはいません。来年、１月12日（日）には「鎌倉丸ごとハイキング」が企画されています。北鎌倉駅前に９時集合です。鎌倉アルプス、切通し、矢倉巡り、等々興味の湧くルートが楽しめるはずです。この他にも、ご存知「沼津アルプス」「宇都宮アルプス」と名前のついた山道があり、何時か挑戦しようか、という話も出ました。また、「ぐるり丹沢」をもう一度、「ぐるり奥秩父」は厳しいかな、「ぐるり箱根」も景色が楽しめる、とか。

▽ごく最近、富士山で中高年パーティーの滑落事故がありました。当日、恒例の「トレーニング山行」で鍋割山稜・小丸尾根を登られていた佐薙さんから、「（ザイルを使って）コンテで登っていたのだろうか？　スタッカットだったのだろうか？　こういう場合はどっちが良いのだろうか？」の問題提起がありました。滑落したメンバーの中にはエベレストに挑戦した様なベテランも入っていた様で、またきちんとした「山岳会」のパーティだったようですし、改めて冬富

士の怖さを認識させられた事故でした。

▽「山讃譜」のピアノ演奏（国立音大２年菊田さん）はすでにホームページで聞ける様になっていますが、これに加えて、佐薙版（ご自分で唄われたメロディーを奥様が譜面に落とされたもの）を菊田さんに演奏してもらって録音し、比較してみようという企画があります。会員それぞれに「俺の教わったのが正調のはずだ」と信じていると思います。出来れば新年会で聞き比べて見ようではないか、という話が進んでいます。

▽札幌の蛭川さんが「心臓バイパス」手術で今日（16日）入院され19日に施術との情報がありました。天皇陛下も最近受けられて元気になられた様に、術後は「酒はグイグイ、山はバリバリ」の予定だそうです。無事退院が待ち遠しい所です。

▽「庄内美人」、「山形美人」と言われる様に、日本海側の東北地方には色白の美人が多い、とはご当地出身の方々が良く言われます。「庄内」には「京ことば」名残があるように、京の美人が移って来たのだそうです。その証拠に、山間部には美人が少ない、なぜならば関東から流れて来たからだ、という説があるそうですが？

▽「最上川」、「富士川」の舟運の話から、「舟歌」というのは世界的に、荷物を運んだ帰りの船を上流に引き上げる時に唄われたものだそうです。「ボルガの舟歌」しかり、古代エジプト、チグリス・ユーフラテス等の石に刻まれている絵にも遺されているそうです。富士川では、往路４～５時間の距離を復路は、２人１組が２組で引き上げるのに４日もかかったという話です。皆さん物知りです。

●山行報告

佐薙　12／1　九鬼山・菊花山

12／13　丹沢・小丸～鍋割山

三井　12／1　九鬼山。懇親山行

遠藤　12／1　九鬼山　懇親山行

竹中　11／19　奥多摩氷川屏風岩クライミング。ＮＭＫＢ事前トレーニング、藤原さんと　＊ＮＭＫＢとは、Nakagawa Memorial Kita-Dake Butress 中川記念北岳バットレス行の略称。

11／23　ＪＡＣ多摩支部・陣馬山。安全委員会・安全講習、（読図、観天望気）

12／1　懇親山行（九鬼山～馬立山～菊花山）。賀状用富士山撮影、かあちゃんで盛り上がる。

12／5　丹沢・広沢寺クライミング。ＮＭＫＢトレーニング　藤原さん、吉川君（３年）

本間　11／22　矢倉岳。神稜会ハイク

12／1　九鬼山。懇親山行

12／8　戸倉三山。藤原組中村短大

12／11、12　塔ノ岳。昼から会山行

小島　12／1　懇親山行（九鬼山～菊花山）

佐藤（久）　なし

高崎（俊）　なし

中村（雅）　11／23　初狩駅～滝子山・大谷ヶ丸～笹子駅。藤原組中村短大（中村学校改称）。中村、藤原、前嵩西（川名さん友人）、長島（学生）

12／1　九鬼山～菊花山。懇親山行

12／8　藤野駅～陣馬山～市道山～入山峠～武蔵五日市。本間（市道山で合流）、中村、藤原、宮武、前嵩西

宮武　12／1　九鬼山～菊花山。懇親山行

12／8　陣馬山～市道山。中村、藤原、前嵩西

●山行計画

三井　なし

遠藤　なし

竹中　12／18　広沢寺クライミング。ＮＭＫＢトレーニング　藤原さんと

12／28　高尾山　シモバシラ観察会。多摩支部自然保護行事

1／18　奥多摩（御前山）。多摩支部初級

登山教室付き添い

本間　12／21　大岳山。藤原組中村短大

1／12　鎌倉アルプス。藤原組中村短大

小島　1／12　鎌倉アルプス。藤原組中村短大

中村（雅）　12／21　鋸山～大岳山～馬頭刈山。藤原組中村短大

1／12　鎌倉まるごとハイキング（鎌倉のハイキングコース全てを踏破）。藤原組中村短大

1／19　岩苔石山～棒の折山。藤原組中村短大

佐藤（久）　なし

高崎　なし

■2014年1月20日■

【出席者】 佐薙、三井、遠藤、本間、小島、佐藤（久）、高崎（俊、記録）

▽針葉樹会の公式行事、総会とか新年会のある月の三月会は集まる会員の数が多くはないのが通例ですが、今回は7名が出席でした。それなりに賑やかな会合になりました。常連の中村（雅）さんは風邪、岡田さんは「身体検査」だったそうです。

▽佐薙さんが顔を出されれば、話題は自ずと富士山から始まります。本間さんが、横浜のランドマークタワーからの詳細スケッチを巻き物にして、また相鉄戦の弥生台駅といずみ野駅の中間の南側にある「稲荷神社」から望む富士山の写真を持参されました。この話の発端は、大手町の「中央気象台」から富士山頂の「剣ケ峰」が目視出来るとすれば、富士山頂を構成する八つの峯はどう言う位置関係になるか、を実証しよう、と言う話だった様です。横浜市泉区からの写真では、富士山のピークは左から、三島岳、剣ヶ峰、伊豆岳、大日岳、久須志岳、白山岳、となり、横浜ランドマークから見ても左から2番目が「剣ケ峰」です。

▽当然の成り行きとして、富士山にまつわる話になれば、新田次郎の小説も話題になります。今回は「剣ケ峰」に気象観測のレーダーを設置する話が主題の「富士山頂」です。東京オリンピックの開催された１９６４年に設置され、翌年に運用開始、１９９９年に気象衛星等に取って代わられ運用を終えたレーダーを格納する「ドーム」は直径9メートル、重さ６２０kgで、これを空気の密度が低い山頂にヘリコプターで設置する模様が感動的に描かれている、と言います。

▽藤沢の遊行寺（清浄光寺）、時宗、一遍上人と話は進み、どう言う訳か、戦争直後の日本史の教科書は黒塗りだらけだった、と云う話から、センター試験の問題に飛び、あの英語の問題は、アメリカ人・イギリス人等「英語を母国語」とする人達も満点は取れないだろう（「だからどうした？」という話にはなりませんでしたが）。この続きで「七福神」の内、日本起源の「神」は「恵比寿」だけで、他はヒンドゥ教の神様（大黒天、毘沙門天、弁財天）、道教の高僧（福禄寿、寿老人）、仏教僧（布袋）なのは何故か？となると、残念ながら、もう筆者は付いて行けません。

▽今年の夏に、北海道・知床に行こうという計画がありました。当初は羅臼岳に登った後、斜里岳に登るか、雌阿寒岳にするか、決めかねていましたが、北海道地元の小野さんの助言・提案もあって、車で移動して「三つとも登ろう」という結論に至った様です。7月3日に女満別空港に集合し、5日をかけて踏破する計画になりました。最近、心臓バイパス手術を受けられた蛭川さんも、予後さえ良ければ参加される事になるでしょう。

▽1月12日には「鎌倉丸ごとハイキング」が、会員10名、学生2名（原、辰川）他3名の

参加で実施されました。風は冷たかったものの陽は暖かく、ハイキング日よりを楽しまれました。建長寺から歩き始め、半僧坊のキツい登りに閉口したもののその後は順調に歩き、横浜での反省会も盛り上がった様です。ついでに、新田義貞が剣を投じて潮が引き、鎌倉に攻め入った、の話は、当時「地球温暖化」が進んでいた一つの自然現象だった、と言う説があるそうです。

▽皆さんは「認知症対策」として何かやっていますか？　対策の一つとして、「運動をしながら頭を使う」、具体的には、例えば「並んでランニングマシンの上を歩きながら会話をする」とか。半年で効果が現れた、と言う事例もあるそうです。

●山行報告

本間　12／21　鋸山　雪のため大岳山には行けず、往復。ＦＮ（藤原組中村）短大、前嵩西さん

1／12　鎌倉アルプス3／4コース。ＦＮ短大山行兼新年会

1／19　棒ノ折山（高水三山に変更）天気晴朗なれど風強し。ＦＮ短大山行（商学部1年中野さん初山）

中村　12／21　鋸山（奥多摩駅から往復）。本間、藤原、前嵩西（川名さんの友人）と一緒。雪の為↓大岳山↓馬頭刈山は断念。ＦＮ短大山行

1／6　十二ヶ岳（小野川駅から往復）。藤原さんと二人、スノーシュー初歩きのつもりが雪少なく軽アイゼンを使用。

1／12　鎌倉丸ごとハイキング。①鎌倉アルプス、②平成巡礼道、③祇園山ハイキングコース、④源氏山ハイキングコース　ＯＢ10名、学生2名（原、辰川）、他2名。藤原、原、辰川、前嵩西は全コース、その他は①～③。ＦＮ短大山行、横浜駅近くで全員参加の新年会。

1／13　稲田駅↓仏頂山↓高峰↓雨巻山↓羽黒駅八溝山地の三山縦走。雪無し。藤原さんと一緒、岩瀬駅まで歩く予定が門毛から羽黒駅まで地元の人に送ってもらった。

三井　1／12　鎌倉アルプス

小島　1／12　鎌倉アルプス

佐藤　なし

●山行計画

三井　なし

本間　2／2　竜爪山（静岡市近郊）　単独

2／12　三筋山（伊豆半島）

2／15・16　塔ノ岳。丹沢・新年山行

2／23　武川岳・伊豆ヶ岳。ＦＮ短大山行

小島　なし

中村（雅）　2／9　奥多摩駅から鷹ノ巣山往復。北八ケ岳合宿に参加できない人向け。ＦＮ短大山行

2／11　高川山・岩殿山。冬富士ビューポイント2山めぐり。ＦＮ短大山行

2／23　武川岳・伊豆ヶ岳。ＦＮ短大山行

佐藤（久）　なし

高崎　なし

編集後記

▼予定より一か月余り遅れになりましたが沢山の原稿を頂いて会報１２９号をお届け致します。まずは元山岳部長の関恒義さんの追悼です。私の現役時代の部長で難しい数学の教授でした。２年の時に試験に自信がなくて、山の合宿の前に御自宅に伺いました。直ちにウイスキーが出て「成績の事より山の事を考えて宜しい。無事に帰ってくれば可はつけてやれるだろう」と言って頂きました。良き時代の事でした。ご冥福をお祈りいたします。これでまた針葉樹会員が減りますが、一方でご紹介しておりますように漸く現役が充実してきました。その結果として今年は針葉樹会にも三人の新人が入ることになりそうです。是非この傾向を維持したいものです。その為に本間・中村（雅）・藤原会員を中心とした学生幹事の続けている学生との山行の努力を針葉樹会員全員でサポートすることが大切だと思います。せっかく集まってきた学生たちが安全に山を楽しめるように少しでも支援して一橋山岳会の発展に繋げられたらと願いつつ会報をお届けします。（小島）

▼蛭川さんの「山讃賦の謎」は針葉樹会報ならではの読み応えある労作で、編集幹事としても嬉しい限りです。これを機に歌い方のスタンダードが成立すればと願います。ところで、２月の記録的な大雪で奥多摩も大変でした。青梅駅から先へ行く電車は一週間も運休。三月下旬になっても林道に雪が残っていて日原などにあるわさび田へはまだ入れません。我々のわさび田にもどうにか行けるようになりましたが、鹿除けネットが雪ですべて倒れました。わさびの若葉をシカやカモシカに食べられてしまう前に網を修復しないと、とあせる一方、母校の都立小山台高校が春の甲子園に初出場するので応援にも行きたいしということで悩ましい春のお彼岸です。（井草）

▼中村・藤原「短大」に、昨年、２度、参加させていただきました。菊田果琳さんとは編笠山、原萌子さんとは南高尾山稜へ。現役の女子山岳部員と山に行けるとは夢のようでした。また、「短大特待生」の前嵩西（まえたけにし）涼子さんは、川名も計画に絡んだ女子学生向け瑞牆山・編笠山の山行に、藤原さんの了解のもと、お誘いした私の友人です（彼女は沖縄出身で、フルマラソン出場経験者）。新たに増えた山の仲間が、それぞれいろんな山登りにトライするなかで、自分に合うスタイルを見つけ、楽しんでいけますように。今回の会報にも、そんな先達の例がたくさん盛り込まれていると感じました。（川名）

■会費納入のお願い

平成25年度（25年6月～26年5月）の会費納入をお願いいたします。

会費（普通会費）は卒業年次に関係なく、一律５０００円です。（ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず賛助会費を募集しております。賛助会費は一口１０００円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっておりますので、その資金手当てのためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

◎会費納入先◎

三菱東京ＵＦＪ銀行　赤坂支店

口座名　針葉樹会

口座番号　普通４８２５６４７

＊振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入してください。

会計幹事　佐藤久尚